

田中下土浮遺跡・芋川氏館跡(第3次) 発掘調査報告書

2004

長野県上水内郡三水村教育委員会

田中下土浮遺跡・芋川氏館跡(第3次) 発掘調査報告書

2004

長野県上水内郡三水村教育委員会

発刊のことば

村の埋蔵文化財に指定いただきました『田中下土浮遺跡』の発掘調査報告書を発刊する運びとなりました。

下土浮遺跡は芋川田中と中峯の水田地帯に位置し、平成14年芋川氏館跡発掘調査員が周辺探索中に、芋川バイパス工事現場より平安時代の土器の破片数点を発見し教育委員会に報告がありました。付近には芋川氏館跡がありまた、小野遺跡の延長線であることを考慮し、文化財調査委員会に文化財指定の諮問をいたし試掘調査を実施しました。埋蔵文化財として登録すべきとの答申をいただき『田中下土浮遺跡』と命名し一円を地域指定いたしました。

発掘調査は県道長野荒瀬原線のバイパス化に伴い施工される道路敷き部分について平成13・14年度の芋川氏館跡発掘調査の継続により、埋蔵文化財緊急発掘調査事業として調査したものであります。

調査には、引き続き日本考古学協会会員の笹澤浩先生指導のもと、平成15年4月28日から7月30日までの短期集中で行いました。幸い天候に恵まれまた村内から応募いただいた調査に参加の皆さん、発掘経験のある方々が多く、炎天下にもかかわらず細心の配慮で効果的に調査を進めていただきました。本調査区域は幅15m長さ100mと狭長でありましたが平安時代の土師器や須恵器、9軒の竪穴住居跡・かまど等数多くの出土品があり、三水村にとって貴重な文化財の発掘がありました。

また、芋川氏館跡は昨年に引き続いて実施した第3次調査で主郭の一部を発掘調査し、中・近世の遺構・遺物とともに、縄文土器の出土も數多くありました。

この報告書は芋川先人の文化の高さと私達現代人が失ってしまった、心の豊かさを感じさせてくれる興味の尽きないものであります。地球の限りある資源を使い豊かさの真只中に居る私達、この物語（調査報告書）は私達に大切なことを示唆していると思います。

終わりにこの調査にご協力下さいました関係各位に敬意と感謝を申し上げ発刊のことばといたします。

平成16年3月

三水村教育委員会
教育長 渋沢 清

例　　言

1. 本書は主要地方道長野荒瀬原線改良工事に係わる長野県三木村芋川所在の田中下土浮遺跡と村指定史跡芋川氏館跡（第3次）の発掘調査報告書である。
2. 本書で使用した地図は長野建設事務所作成の路線図（1:500）及び国土地理院発刊の地形図（1:25,000）を使用した。使用に際してはともに許可済である（承認番号 平15関復第75号）。
3. 空中写真・測量は共同測量社（長野市）に委託したものであり、測量実測図は1:20を基本とした。
4. 写真撮影と遺物実測、トレイス等は笹澤がおこなった。
5. 執筆分担は下記のとおりである。編集は笹澤がおこなった。

森 佳也 第1章第1節

池田 隆 第1章第2節

笹澤 浩 上記以外のすべて

6. 本書で使用したおもな参考文献は巻末に一括した。
7. 遺跡の記録と出土遺物は三木村教育委員会が保管している。
8. 発掘調査・報告書作成にあたり多数の方々に指導・支援を受けた。別に記載したが特に下記の二氏には、城館と出土品について、協力頂いた。ともども感謝申し上げる。
河西克造（長野県埋蔵文化財センター）一城館跡一般
水沢幸一（新潟県中条町教育委員会）一珠洲焼・陶磁器類・城館跡

凡　　例

1. 遺跡記号名は、三木村の遺跡記号名に従い、三木村のSと遺跡名から2字をとり、田中下土浮遺跡は「SS-D」、芋川氏館跡は「S I Y」とした。
2. 遺構は通常に従い次の略記号を使用した。ただし、堀内底部の障壁土坑、堀底台は本番独自の呼称である。
S K—土坑、障壁土坑 S D—溝、水路、堀 S B—堀立柱埋物、平地式建物 S I—堅穴住居 S X—土橋、堀底台、列石、集石などその他の遺構、S A—上塁、柵列
3. 土層は遺跡ごとに統一して記号化したが、それに従わないものは土層図に明示した。
4. 本書に掲載した実測図の縮尺は原則下記のとおりであるが、従わないものもあり、それぞれ縮尺を明示した。

遺構実測図

遺構分布図・グリッド配置図 1:200、1:800 遺構全体図 1:400、1:500

遺構図 1:40、1:50、1:100

土層図その他の遺構詳細図 1:20、1:40

遺物実測図・拓影図

古代の土器、石製品 1/4 小型石器、中世土器、陶磁器、土器拓影図 1/3

5. 遺構実測図の方位は真北。磁北は7度20分西に偏している。座標は国土地理院の国土座標第8系を使用。
6. 遺物実測図の断面は繩文上器・土師器・瓦質土器は白ヌキ、須恵器・珠洲焼は黒色、織維上器・灰釉陶器・陶磁器類はアミとした。また黒色土器は内面にアミをかけている。
7. 古代の土器の器種分類、年代比定などは『長野県史』（笹澤1988）に従っている。

目 次

発刊の旨意	
例言	
凡例	
目次	
図目次	
写真図版目次	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
1. 遺跡発見の経緯と調査の目的	1
2. 調査に至る経緯	1
3. 調査團の構成	2
4. 現地指導・協力者	3
第2節 調査の方法	3
1. 調査前の現状	3
2. 発掘調査の方法	4
3. 発掘調査日誌（抄）	5
第2章 遺跡の環境	8
第1節 遺跡の所在と環境	8
1. 遺跡の位置	8
2. 地理的環境	8
3. 周辺の遺跡	9
第3章 田中下土浮遺跡	10
第1節 平安時代の遺構と遺物	10
1. 墓穴住居S I 01	10
2. 墓穴住居S I 02	10
3. 墓穴住居S I 03	10
4. 墓穴住居S I 04	11
5. 墓穴住居S I 05	12
6. 墓穴住居S I 06	12
7. 墓穴住居S I 07	13
8. 墓穴住居S I 08	13
9. 墓穴住居S I 09	13
10. 溝S D01	14
11. 溝S D04	14
12. Ⅳ腰尾川跡S D16	14
第2節 中世以降の遺構と遺物	15
1. 振立柱建物	15
2. 溝	15
第3節 包含層出土の遺物	16
1. 織文時代	16
2. 平安時代	16

3. 中・近世	17
第4章 平安時代の集落構造と変遷	17
1. I期の集落構造	17
2. II期の集落構造	18
第4章 芋川氏館跡の調査（第3次）	20
第1節 遺構と遺物	20
1. 基本層序	20
2. 繩文時代の遺構と遺物	21
3. 平安時代と遺構と遺物	21
4. 中・近世の遺構と遺物	22
第2節 芋川氏館跡東南地区の建物群の性格	25
1. 芋川氏館の構造	25
2. 西南地区的構造と変遷	25
3. 芋川氏館の廃絶	27
第5章 まとめ	28
引用・参考文献	29

図 目 次

第1図 田中下土浮遺跡グリッド配置図	4
第2図 芋川氏館跡（第3次）グリッド配置図	4
第3図 田中下土浮遺跡・芋川氏館跡位置図	8
第4図 田中下土浮遺跡における平安時代集落の変遷	17
第5図 芋川氏館跡（第3次）土層配置図	20
第6図 芋川氏館跡復元図	26
第7図 芋川氏館跡（第3次）西南地区的建物配置	27
第8図 田中下土浮遺跡全体図	30
第9図 田中下土浮遺跡発掘図(1)	31
第10図 田中下土浮遺跡発掘図(2)	32
第11図 田中下土浮遺跡発掘図(3)	33
第12図 田中下土浮遺跡発掘図(4)	34
第13図 田中下土浮遺跡堅穴住居 S I 01・S I 04, 溝 S D02実測図	35
第14図 田中下土浮遺跡堅穴住居 S I 05・S I 07実測図	36
第15図 田中下土浮遺跡堅穴住居 S I 03実測図	37
第16図 堅穴住居 S I 05カマド実測図	38
第17図 田中下土浮遺跡堅穴住居 S I 02実測図	38
第18図 田中下土浮遺跡堅穴住居 S I 06実測図	39
第19図 田中下土浮遺跡堅穴住居 S I 08実測図	40
第20図 田中下土浮遺跡掘立柱建物 S B01・S B02, 堅穴住居 S I 09実測図	41
第21図 田中下土浮遺跡土層図(1)	42
第22図 田中下土浮遺跡土層図(2)・土層配置図	43
第23図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(1)	44
第24図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(2)	45
第25図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(3)	46
第26図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(4)	47
第27図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(5)	48
第28図 田中下土浮遺跡出土の繩文土器、須恵器、 土師器、黒色土器、灰釉陶器、中世・近世陶磁 器、磨製石斧、拓影・石器、土器実測図	49
第29図 芋川氏館第1～3次発掘全体図	50
第30図 芋川氏館跡（第3次）発掘図(1)	51
第31図 芋川氏館跡（第3次）発掘図(2)	51
第32図 芋川氏館跡（第3次）発掘図(3)	52
第33図 芋川氏館跡（第3次）掘立柱建物 S B06実測図	52
第34図 芋川氏館跡（第3次）掘立柱建物 S B02 ～S B04実測図	53
第35図 芋川氏館跡（第3次）掘立柱建物 S B04・ S B05、堅穴住居 S I 01、土間状造様 S X12実測図	54
第36図 芋川氏館跡（第3次）井戸 S E01、石組 S X10、集石 S X09・S X11実測図、土層図(1)	55
第37図 芋川氏館跡（第3次）土層図(2)	56

第38図 芦川氏館跡（第3次）出土 繩文土器(1)…57	小皿、中世陶磁器、中・近世陶磁器……………59
第39図 芦川氏館跡（第3次）出土 繩文土器(2)、須恵器、珠洲焼、近世陶器……………58	第41図 芦川氏館跡（第3次）出土 石器(1)・石製品(1)…60
第40図 芦川氏館跡（第3次）出土 土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、内耳上鍋、土師器	第42図 芦川氏館跡（第3次）出土 石製品(2)…61
	第43図 芦川氏館跡（第3次）出土 石器(2)・石製品(3)…62

写真図版目次

田中下土浮遺跡

P L 1

全景（南上空から）

全景（東上空から）

P L 2

左：全景（上端北）

右上：溝 S D01（東から）

右中：掘立柱建物 S B02 挖り方立ち倒（振り方・柱痕跡・柱痕）

右下：竪穴住居 S I 03 柱穴振り方と柱痕跡

P L 3

現堀尾川と旧斑尾川跡（上端西）

旧斑尾川跡と竪穴住居跡群（西から）

P L 4

A区全景（北から）

A区全景（南から）

P L 5

竪穴住居 S I 05（東南から）

旧斑尾川東岸と竪穴住居 S I 06

P L 6

竪穴住居 S I 06完掘状態（西から）

竪穴住居 S I 06（西から）

竪穴住居 S I 06（埋土）（西から）

P L 7

竪穴住居 S I 03（北から）

竪穴住居 S I 03（南から）

竪穴住居 S I 02（南から）

P L 8

竪穴住居 S I 05カマド

左：西から

右：カマド石据付け状況

左：北から

右：東から

左：竪穴住居 S I 04 カマド石据付け状況

右：竪穴住居 S I 03 周溝と柱穴

竪穴住居 S I 06

左：西北隅

右：北壁中央カマド痕跡

P L 9

C地区全景（北から）

竪穴住居 S I 01と暗渠 S D02振り方

P L 10

竪穴住居 S I 08（北から）

竪穴住居 S I 08（南から）

竪穴住居 S I 08（東から）

P L 11

B地区 挖立柱建物群（北から）

B地区 挖立柱建物群（南から）

P L 12

掘立柱建物 S B01・S B02（北から）

掘立柱建物 S B02（南から）

芦川氏館跡

P L 13

全景（西上空から、東から鼻見城を望む）

P L 14

全景（西から）、柱穴群と井戸 S E01（西から）

P L 15

掘立柱建物群（西から）

土間状遺構 S X12（南から）

P L 16

全景（上空から）

左：主郭東南隅

右：西土塁土層断面

左：井戸 S E01埋土

右：掘立柱建物

S B01周辺土層

左：集石 S X09

右：石組 S X10

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1. 遺跡発見の経緯と調査の目的

三水村教育委員会は長野県上水内郡三水村芋川にある三水村指定史跡の芋川氏館跡を、2001年（平成13）から2002年にかけて、第1次、第2次の2度におよぶ主要地方道（県道）長野荒瀬原線改良工事に伴う緊急発掘調査を実施した（笠澤・池田・森2003）。田中下土浮遺跡は第2次発掘調査の折、芋川氏館跡の南側に隣接する路線内において古代から中世に至る多数の土器片が散在していたことにより発見された周知されていなかった遺跡である。遺跡は三水村芋川の下土浮・石田・上土浮の3地籍に渡っていたが、主として下土浮地籍に所在するところから、田中下土浮遺跡とした。遺跡地内はすでに近世には水田化されており、今回の発見まで埋蔵文化財包蔵地として周知されることはなかった。したがって、遺跡内は道路工事に先行した耕作土の拂土作業と暗渠施設ならびに水路の切り回し工事が終了しており、土器片はこの際に出土したものである。水路や暗渠施設工事で遺跡の一部は破損していたが、試掘調査で幸いにも拂土工事から破壊を逃れた多数の土坑やビット等のあることが判明した。そこで教育委員会は長野県教育委員会出川裕典指導主事の指導のもと、長野建設事務所、三水村建設課と現地で協議をおこない、2003年の早い時期に緊急発掘調査を実施し、記録保存することとした。

また、道路工事に關係して芋川氏館東南地区1,000m²が破壊されることになりこの部分も併せて発掘調査（第3次）を実施した。

調査は芋川氏館跡の調査（第1・2次調査）で引き続きおこなうこととした。

2. 調査に至る経緯

- 平成14年7月5日 芋川氏館跡の発掘作業に従事していた永野龍雄氏が、発掘現場より南約200m役場寄りの芋川バイパス建設現場より多数の土器片を発見し、調査団長に報告。同日教育委員会に電話で報告。
- 7月8日 教育委員会及び建設課職員が現場確認。今後の対応について協議。
- 7月17日 県教育委員会出河氏並びに長野建設事務所職員及び教育委員会建設課職員による会議を開催し、試掘調査が必要との結論を得る。
- 8月1日 黒埋蔵文化センター河西氏、団長による試掘現場の選定。
- 8月5日 試掘作業。住居跡地確認、教育委員会に報告。
- 8月22日 県教育委員会へ遺跡発見の通知
- 9月9日 本調査必要性を確認（団長並びに教育委員会）建設事務所にその旨連絡
- 10月23日 県埋蔵文化センター並びに建設事務所及び教育委員会三者で協議。
- バイパス工事は来年度完成予定なので、4月より発掘調査を行う旨の確認。
- 12月25日 教育委員会より村文化財調査委員会へ包蔵地の指定を諮詢。
- 平成15年1月16日 文化財調査委員会より「田中下土浮遺跡」としての指定の答申。
- 4月4日 長野建設事務所より、開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼受ける。
- 4月15日 三水村教育長と長野建設事務所長の両者において田中下土浮遺跡発掘調査の委託契約を交わ

す。

工期 15年4月15日から11月28日

調査委託料 10,480,000円

11月10日 三水村教育長から長野建設事務所長へ委託契約変更願を提出（地盤が固く住居跡が多数発見され、作業日数が増加した）

11月13日 変更委託契約締結

工期 16年3月31日まで

調査委託料 12,631,500円

3. 調査団の構成

調査委託者 長野建設事務所長

調査受託者 三水村教育委員会

調査会

滝澤 武利 教育委員

碓井 明美 タ

沖 大啓 タ

滝澤 治子 タ

洪沢 清 タ 教育長

調査団

団長 笹澤 浩 日本考古学協会会員

調査主任 池田 陸 文化財調査委員長（15年9月30日満了）

調査員 畑田 光好 文化財調査委員（タ）

外山 吉忠 タ（タ）

渡辺 宜雄 タ（タ）

黒沢 順男 タ（15年10月1日より）

深津 直晴 タ（タ）

名古 忍 タ（タ）

安全管理者 待井 敏 村松 直視（株式会社村松建設）

発掘作業員・整理作業員

常田 篤夫 中山 市治 常田 恵子 關 新一 羽入田 賢 宮島 俊嗣

山田 哲也 宮島 美男 三澤 貞利 百合 ゆりえ 雨澤 次子

調査協力者

森 晃一 地権者

長田 健 長野建設事務所長（平成13年）

小玉 文武 長野建設事務所長（平成14年）

下沢 治彦 長野建設事務所管理計画課計画調査技師

向山 智也	タ	工事第二係技師
田中 洋	タ	用地課用地第二係主事
河西 克造	長野県埋蔵文化センター調査研究員	
出河 裕典	長野県埋蔵文化財係指導主事	
水沢 幸一	新潟県中条町教育委員会	
山浦 幹雄	建設課長	
荒井 利巳	タ 係長(平成13年)	
竹内 裕	タ 係長(平成14年)	

事務局

教育次長	宮島 史朗
公民館長	風間 文彦
副 タ	関 新一
社会教育係長	森 佳也
タ 主幹	小山 静雄
タ 主任	渋澤 直樹
タ	朝比奈 澄子
タ	西澤 智恵子
学校教育主幹	黒岩 康
臨時職員	中島 和子

4. 現地指導・協力者(順不同)

小林計一郎、金子 拓男、矢野 恒男、小柳 義男、佐藤 信之、佐藤 廉二、松沢 芳宏、市川 隆之、
中村 由克、中殿 章子、横山かよ子、小山 丈夫、笠澤 正史、妹川 吾作、金井 清敏、小林三喜男
(森 佳也)

第2節 調査の方法



水田造成跡

1. 調査前の現状

田中下土浮遺跡は本線部分の幅8mですでに水田耕作土を含めた黒色土の大半を、地山である黄褐色粘質土上面まで表土掘削工事が完了し、遺構の一部が露呈していた。現地表下-50cm前後であり、遺構の1部は失われていた。

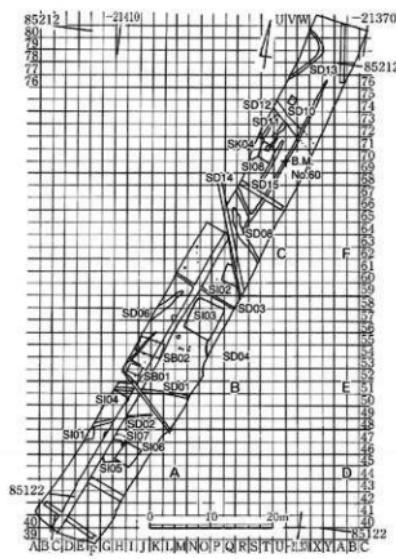
一方、A・B区では本線部分に接して西側に幅3.5mの歩道が付設されるが、この部分は表土掘削されず、現地表面が残されていた。

すでに述べたとおり、遺跡の大半は近世以降の水田

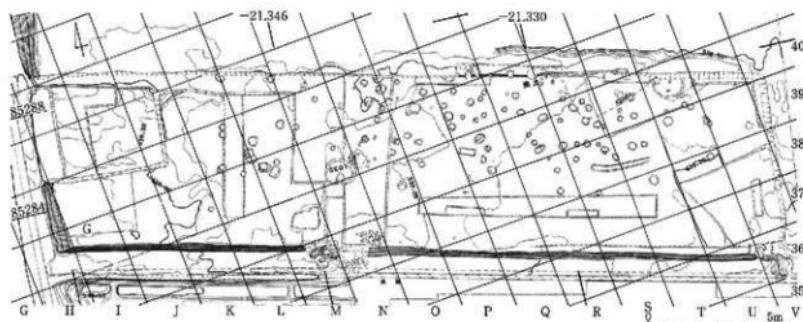
地帯であった。しかし、遺跡の東側に接して斑尾川が蛇行しながら南流しており、その影響を受けて遺跡周辺は複雑な微地形を形成していたことは、「土浮」「石田」などの小字名からも推定できる。したがって、満田地帯の水田造成では暗渠は必要不可欠な施設であり、かつて遺跡の土地所有者であった小林三喜男氏もまた、昭和30年代に圃場整備を実施した時も、東西方向に何本もの暗渠を入れた（S D03）とのことであるが、発掘調査では小林氏設置以外の多様な暗渠が検出された。つまり遺跡は近世以降の水田造成に加えて昭和30年代の圃場整備によって削平と埋土、暗渠の設置などで地形はかなり改変されていた。表土下30cm前後で、昭和30年代の圃場の基盤があり、ブルドーザーのキャビリラ痕が認められ、水田の床土が作られていたが、さらに10~20cmの黒土は削平され、1部は遺構面に及んでいた。これは近世以降の水田造成も加わっていたと思われるが、発掘調査では近世以降の水田面は確認できない所から、その影響は小さかったものと思われる。また、圃場整備に伴う基盤工事は黄褐色粘質土には達しておらず、1部遺構の上端の削平にとどまっていた。ただし、B区水路北側は歩道部分を含め、表土掘削工事が全域に及んでいた。

A・B区では本線と歩道に接した部分、C区では本線東側に幅1m程度に掘削され排水用施設が設置され、この部分は完全に遺構は失われていた。また、東西方向に水路用施設が調査予定地内でも3ヶ所埋設されており、この部分も同様に失われていた。

芋川氏館跡の西南地区はかつて水田化されていたが、現状では草地となり一部物捨て場となっている。



第1図 田中下土浮遺跡グリッド配置図（1:800）



第2図 芋川氏館跡（第3次）グリッド配置図（1:200）

2. 発掘調査の方法

田中下土浮遺跡は過去のさまざまな土地利用と現状に合わせて、すでに遺構の一部が露呈していた本線部分から調査を実施することとした。調査区は水路施設が2ヶ所あり、これらを基準に南側の水路施設からA・B・C区とした。ただし、水路施設はグリットを斜めに切る形のためにグリットによっては二分されることになる。調査区は、C区の道路工事用中心杭No60を基準（国土地標第6系座標X=85,179.446、Y=-21,380.219、H=536.896m）とし、グリットの基準とした。グリットは遺跡内を網羅できるように2mグリットを配した。南北方向に南から北へ算用数字を、西から東へアルファベットを組み合わせグリット名とした。尚、南北方向は磁北である。中心杭No60はC V 69である（第1図）。

宇川氏館跡のグリット設定は基準のベンチマークは道路用測量杭HR-6（X=85,299.34、Y=21,358.22）を使用するなど第1次・第2次調査に準拠した（第2図）。

田中下土浮遺跡の調査予定地は南北方向200mと長く、かつ水田地帯にあるうえに隣接して民家もある。加えて、東側には深さ5m前後の斑尾川がある。排水はすべて調査区域外の南北側の路線内に運搬することとした。重機による排土、グローダンプとベルトコンベアによる排土の運搬、水田及び低湿地からの排水に適宜水中ポンプを使用した。重機の運転を兼ねた安全管理者を置いたが併せて斑尾川脇の調査とその河川路の調査も予想されたからである。

3. 発掘調査日誌（抄）

田中下土浮遺跡

平成15年

4月28日 現地で発掘調査発会式終了後、トレント設定など調査開始

4月29日 発掘はA区南寄りの2本の排水施設で囲まれた東西AB～AL、南北36～51ラインのうち、包含層が良好な歩道部分から開始する。重機により現水田面の床土を除去、床土は層状に容易に剥がれ、その面から湧水と断面鉄歯状の多数の条線が認められ、このため排土はここでとめることとした。

5月6日 歩道部分の多数の条線は旧耕作者の証言により、昭和60年代の圃場整備工事の際のブルドーザーによるキャタピラ痕と判明し、以下は人力によって発掘を進めた。BG48とその周辺で櫻使用の暗渠（SD02）、BK50で少数のビットと東西溝（SD01）を検出。湧水と固い粘質土に悩まされる。

5月7日 東西溝SD01の埋土は黒色土で出土遺物から平安時代と判明。東西暗渠SD02とその間の調査を続行、火床や土坑を検出。土坑及びこの付近から平安時代の土器片が出土。火床はカマド痕跡で、すでに上部が失われた整穴住居SI04の痕跡と後日判明した。

5月9日 AE45付近の調査・遺物の出土もなく、とりあえず、この部分の調査は保留。

5月12日 B区歩道部分より排土の上、調査開始。水田寄りに細い排水溝を設置、尚B区車道部分は遺構が特に露呈し遺物が散乱していた地区にあたる。このためB区の遺物取り上げは調査当初は広範囲でおこなった。歩道部分は南・北と2分し、車道部分は北西、南西区などである。



圃場整備跡

5月13日 B区歩道部分で、溝・ピットなど検出。黒色土下部の黒褐色粘質土の検出作業のため造構検出は困難を極めた。溝は上部が水田造成などによる削平のため痕跡をとどめる程度に浅く、検出面を黄褐色粘質土まで下げることができなかつたことによる。しかし、造構埋土は黒色で識別はむずかしかつた。



雨中の現地説明会（田中下土浮遺跡）

5月15日 B Q60周辺に堅穴住居S I

02検出。水路施設ボックスの設置で住居北側は失われていた。ここも削平が著しく壁高は低い。

5月21日 S I02の南側B O57周辺で大型堅穴住居S I03判明。著しく削平されていたが、周溝、カマド跡、柱穴などにより判明。ただし、周溝の1部は削平のため失われていた。また、S I03の東南隅より溝S D04検出。埋土内から土師器などが出土、S I03に付設された排水溝と考えた。

5月27日 A地区車道部分の南寄りは、検出面が予想以上に下位にあったため、重機を活用、耕土とともに造構検出続行。堅穴住居S I05検出。カマドの形態が特異なため、作りかえも考慮に入れ慎重に作業続行。別に下層造構として堅穴住居S I06確認。

6月2日 S I03の周溝に接して多数の小ピット並設確認。切り合い関係など重点的に調査、堅穴の構造を知る貴重な資料を得る。S I03はほぼ完掘。

6月5日 S I06調査続行。西壁ぎわに落ち込みがあり、AD40等に設置した現地表下120cmに深掘りしたトレンチでも旧河川跡が確認でき、この落ち込みが斑尾川の旧流路と判明し調査を続行。堅穴住居S I04のカマド等分割調査、上部は完全に削平、カマドの炉床と石組みの痕跡により、カマドは住居北辺にあったことが判明する。

6月6日 三水村立第1小学校生徒見学。S I04細部実測、河川跡・S I06など調査続行。

6月16日 C区調査開始。新旧いりまじった多数の暗渠や自然流路などに加えて削平も著しい。C T70で土師器片がやまとまって出土。堅穴住居S I08確認。住居埋土内に炭を少量含む。しかし、暗渠や掘り込みなどによって堅穴内の破損著しく、平面形確認困難。S I05カマド調査完了。

6月20日 S I06床面検出。柱穴部分の掘り込みはつきりせず。

6月24日 空中撮影。

6月27日 現地説明会。雨中にもかかわらず参加者70名。

6月28日 S I08東壁調査などC区に調査の重点を移す。

7月1日 暗渠S D01下部造構調査。堅穴住居S I01調査。C区調査。

7月7日 C区調査。S I08サブトレンチを入れ、壁面及び西壁に設置されたカマド浅穴の調査で全作業終了。

芋川氏館跡（第3次）

6月26日 田中下土浮遺跡の調査と併行して重機による耕作土及び鉄分集積層までの耕土。

7月2日 調査区の北側に幅1mの土層観察用のトレンチ設定。現整地面を約10cm掘り下げ整地層の確認。この結果、芋川氏館整地面は鉄分集積層の下、黄色を帯びた黒色土（3層）下部の黒色土にあることを確認。中央にもトレンチを設定し同様の結果をうる。



発掘調査の主力を担った皆さん

7月4日 排土と併行して遺構検出。黄色粘質土をブロック状に含んだピット群を検出。

7月9日 田中下土浮遊跡調査完全に終了。調査本格化する。調査区西南はピット群認められず。帶黄色黒色土から近世陶器がまとまって出土。併せて下部黒色土（4層）から縄文土器片が出土し、その包含層の確認。

7月11日 調査区南辺の土手のセクション完了。基本層序が整地層・黒色土・地山となる黄褐色粘質土であることを確認。石組 S X10調査。

7月14日 ピット群ほぼ検出。土壌堆定地にピット群の存在なし。堀り方内を10cmほど掘り下げ柱痕跡確認作業続行。土間状の黄褐色粘土が島状に検出される（S X12）。

7月15日 土壙、西堀との関係把握のため、北側セクションの西寄りを深掘り。

7月17日 ピット群ほぼ完堀し、掘立柱建物 S B02、S B03検出。

7月21日 空撮

7月22日 中央トレーンチ掘り下げ。井戸 S E01確認。ピット群再確認のため整地層を約20cm、重機を併用して排土。未検出のピット群検出。再度掘立柱建物の検討。

7月25日 深穴住居跡 S I01確認。

7月26日 全員による作業本日で完了。

7月29日 全体実測。土層図実測。確認のため未調査となっていた縄文時代包含層の掘り下げ。縄文時代の遺構がないことを再確認。

7月30日 全作業終了。

整理作業

8月1日～平成16年3月31日

（池田 隆）

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の所在と環境

1. 遺跡の位置

田中下土浮遺跡（SSD）は長野県上水内郡三水村大字芋川字下土浮を中心として石田、上土浮にまたがって所在する。標高は536m前後である。芋川氏館跡は田中下土浮遺跡の北に隣接し、芋川字中峯前田にある。

遺跡の所在する三水村は長野県北部地域（北信）にあって、善光寺平の西縁地域（通称西山地域）にある。この地域には北信五岳と呼ぶ飯綱・戸隠・黒姫・妙高・斑尾の五つの火山があり、広大な火山性スロープを西山地域から新潟県妙高村にかけて形成している。またこれら五山は分水嶺でもあり、善光寺平に流れる鳥居川は戸隠・黒姫・飯綱山を水源地とし、高田平野を経て日本海へそぐ間川は、黒姫・妙高・斑尾の各火山を水源としている。この鳥居川から野尻湖を経て閑川に至る地はこれら火山の裾部にあたり、長野県と新潟県の県境がある。古代には信濃と越後を結ぶ東山道の支道、いわゆる延喜の官道が、近世には主要街道のひとつである北国街道が、そして現代は上信越自動車道やJR信越本線がある。

2. 地理的環境

三水村は鳥居川ぞいにあるが主体は斑尾川ぞいの村である。斑尾川は斑尾山塊のひとつ戸谷峰（756m）を主な水源地として流れる小河川で、鳥居川の西側をほぼ並行して西流し下水内郡疊田村で千曲川にそぐ。

斑尾川とそこにそそぐ小河川ぞいには比較的高低差の小さい扇状地とその末端の盆地、ならびにその背後の台地からなる。この台地地形は新第三紀層からなり、地殻変動に伴い褶曲隆起した後の浸食作用によって準平原的な地形となったものである。

田中下土浮遺跡は戸谷峰（756m）を主水源とする斑尾川によってつくられた高低差の小さな小扇状地の扇尖部分に立地する。さして水量が多くない小河川である斑尾川流域に、バラス層やグライ土壤が発達していることは



第3図 田中下土浮遺跡・芋川氏館跡位置図（1:25,000）

高低差の少ない斑尾川の堆積、運搬作用のみに起因するものか判断に苦しむところである。遺跡は扇状部分の馬の背状の尾根とその東西の斑尾川及びその旧河道を利用して立地している。

斑尾川は芋川地区を出ると、鳥居川にそそぐことなく、深い谷となって南流して、下水内郡豊田村若佐千曲川へ合流する。

3. 周辺の遺跡

三水村の遺跡は地形にそって3地区にある。鳥居川ぞいの小規模な段丘上とその背後の山腹上にあるもの、斑尾川上流域の扇状地上にあるもの、斑尾川下流域で、その背後の台地上にあるものとである。

鳥居川ぞいには左岸地域が三水村に属し、縄文時代草創期の原遺跡（小柳1983）があるが、右岸の牟礼村には栄町や兎坂など縄文時代中・後期の好資料を出土する遺跡が多く見られる。このほか、鳥居川ぞいは近世に牟礼宿が栄えた場所であり、中・近世の重要な遺跡がいくつかある。鐘山遺跡は左岸にあり、平安時代の住居跡や中世の遺物が出土した（岩佐・百瀬1984）。また鐘山遺跡に近い岩袋遺跡では地下水位が高いこともあって、中世の曲物や珠洲焼の大甕・擂鉢・瀬戸口系の天目茶碗・カワラケなどが出土している（小柳1984）。右岸では牟礼村矢筒城館跡がある。山城とそれに隣接した店舗跡で、飯綱病院建設に先立つ調査で居館跡の一部が明らかにされた。太田荘の地頭であった島津氏一族の居館跡と伝えられるものである（米川一政他1981）。

斑尾川上流域では扇状地先端の左岸段丘上に古くから考古学界に知られた縄文時代前期の伊豆ヶ入遺跡（小林1976）や、芋川氏館跡遺跡に近接した小野遺跡（小林・矢野1980）がある。小野遺跡は縄文時代前・中・後期、平安時代から中世にわたる三水村屈指の複合遺跡で、1975年に発掘調査された。芋川氏館跡や下土浮遺跡と直接関連ある遺跡として、重視されねばならない。また、同様の遺跡として背後の山頂には山城である若宮城跡や鼻見城跡がある。

斑尾川下流域の台地上には縄文時代中期の北信を代表する大規模遺跡がある。上赤塩遺跡では地元の永野五六・稻庭父子によって資料採集がされ、1995年には道路拡幅工事に伴い発掘調査が実施され、13棟の竪穴住居跡が検出された（小林1976、大久保1979、寺内1991、小柳1997）。このほか今出遺跡（広瀬1975）や東柏原遺跡も赤塩遺跡に匹敵する重要遺跡である。

また、四郎屋敷遺跡からは2001年度の試掘調査で縄文時代前期及び中世の内耳土器が発見され、倉井地籍の台地上の遺跡の一部が明らかにされた意義は大きい。

三水村には31遺跡が知られているが、実体の判明しないものが多く、特に遺跡の所在が面的でなく「点」でしか把握されていない。今後の課題である。

第3章 田中下土浮遺跡

第1節 平安時代の遺構と遺物

1. 穫穴住居 S 101

遺構（第13図）調査区の南西隅、A F 47とその周辺で検出された。竪穴住居の南西隅と西辺の一部を検出したにとどまり大半は未調査地に残る。住居の北側上部には暗渠 S D 02がある。

主軸方位はN 5° Wである。住居跡は水田床土直下の黒褐色土で検出され、埋土は漆黒色である。壁高は削平が著しく10cmであった。周溝の他は未検出であり、床面も軟弱であった。これは住居跡周辺の湧水が著しいことと関係あるものと思われる。

遺物（第26図85・86）土師器北信型大甕（85）と底部を手持ヶズリを施した小形甕（86）の2点のみであった。

2. 穫穴住居 S 102

遺構（第17図）B地区北辺のB Q 60とその周辺で住居の西半分が検出された。残る東半分は水路ガックス設置により失われていた。主軸方向はN 4° Eで規模は東西3.05mである。方形または長方形プランであろう。削平が著しく壁高は7cmとほとんどない状態であった。床面の直上には多量の焼土を含む炭層があり焼失住居である。床面は黄褐色粘質土であるが、特に硬く固められた痕跡はなかった。住居西北隅に70×60cmで深さ15cmの貯蔵坑があり、黒色土器塊が出土した。住居内にははっきりとしたカマドや周溝は認められなかつた。貯蔵坑と重複して、100×76cmの楕円形の浅い掘り込みがあったが、とくに付属施設物とするだけの根拠はなく、竪穴構築時の掘り方の一部と思われる。

柱穴は床面にP₁～P₄と西壁の壁外にP₅（径20cm、深さ10cm）南壁外にP₆（径25cm、深さ15cm）があった。うちP₂～P₄は浅くSD 01の柱穴とするには深度不足であり、P₁、P₅、P₆が対象となる。全掘されていないので、詳細は不明であるが壁外柱を持つ竪穴住居の可能性がある。

遺物（第26図87～89）貯蔵坑から黒色土器3点が出土した。完存または半壊である。甕C（87）と甕A（88・89）があり、ともに内面は丁寧に磨き、その痕跡は不鮮明である。甕は底部下半から全面に回転ヶズリされ、系切底は残されていない。

3. 穫穴住居 S 103

遺構（第15図）B O 57とその周辺部で検出された東西5.0×南北5.8mの本遺跡最大の長方形の竪穴住居跡であり、主軸はN 17° Eである。壁は工事により削平されてなく、北辺中央のカマドも失われ、焼土が70×55cmの範囲内に認められた。周溝は東壁と南壁にあったが、西壁北寄りと北壁の一部は削平が著しく検出できなかつた。周溝幅は18cm、深さは6cm前後である。床面は西壁寄りは黒褐色土であったがそれ以外の大部分は黄褐色粘質土であり、カマド周辺は固くかためられていた。周溝が認められなかつた西壁ぞいは、レベルが低く、周溝・床とも削平されたものと思われる。

柱穴は床面上に大・小の30個がある。しかし、検出面が床面とその下部であったため、床面とこれら柱穴群の新旧関係を知るには制約がある。柱穴（掘り方）と竪穴の位置関係、個々の柱穴の深さと形状、柱穴の埋土、柱穴の掘り方と柱穴との関係、柱穴（掘り方）内出土の遺物などを総合的に検討した。その結果、主柱穴はP₁～P₄であり、柱間は東西（P₁・P₂間）2.4m、南北（P₂・P₃間）3mである。うちP₂～P₄は掘り方がある。これらの柱穴埋土は黑色土であり、掘り方埋土は基盤の黄褐色粘質土をブロック状に多量にまじえた黑色土であった。

柱穴は床面から-45~65cmである。またP₄掘り方にはP₁₅・P₁₆・P₁に接してP₅・P₁₀、P₂に接してP₁₃がある。柱穴の形状・深度と埋土がP₁などと共通する点と、これら柱穴間の切り合い関係から、P₁~P₄の柱配置以前のP₅・P₂・P₃・P₁₆を主柱穴とする柱配置の建物が判明している。その他の配置ははっきりしない。少なくともS I 03は柱痕跡から判断して直径25cm前後の柱を用いて2度の建て替えがあったことになる。したがって周溝・壁とカマドは補修程度で主柱穴のみ取り替え建て直したと云える。なお、P₂掘り方から黒色土器壺(91)と土師器壺片が出土し、建て替えの時期が9世紀前半であることを示している。

このほかの柱穴のうちP₁₇・P₁₈は深さが-30cmで埋土内には黄褐色粘土ブロックを少量まじえるなど共通していた。P₁₄の柱穴内には内耳上鍋片が出土し、P₁₄・P₁₇からなる中世の掘立柱がS I 03の東側路線外にあるものと思われる。またP₆は比較的浅く埋土内に粘土ブロックを少量含み、柱痕跡もなく中世の土坑であろう。

南・北周溝ぞい壁内に一定間隔に径25cm前後の柱穴がある。南周溝には東からP₁₁・P₁₂・P₁₈・P₂₃・P₂₄であり間隔は70cm前後であった。北周溝にも同様にP₂₅・P₂₆・P₂₇・P₂₈があり、P₂₇とP₂₈の間にカマドがある。深さも最大20cmと浅い。周溝内に設置された壁施設を固定する柱穴であろうか。

以上の柱穴以外は不明である。このほか、S I 03のコーナー部分から幅30cm、深さ15cmの溝S D04が傾斜にそって南西方向にあった。その先端は調査地区外となる。S I 03では僅かに床面に伸びていた。埋土は黒色土であり、土師器壺や須恵器など(57~64)が出土した。S I 03に設置された排水溝と思われる。

S I 03の床面には焼土をまじえた炭層が部分的に認められた。とくにP₂₉の埋土は焼土・炭で充填されており、S I 03は焼失住居である。

遺物(第26図) 床面の大部分が削平されていたため、床面上からの遺物は少なく、あっても小片であった。このほかP₁から須恵器壺C(90)・土師器壺B(92)、P₁₂掘り方から黒色土器壺B(91)、P₂₀から土師器小型壺(97)、P₁₃から土師器北信型壺(95)、北周溝から土師器小型壺(96)が出土した。床面直上では土師器越後型壺(93~94)、床面直上から土師器羽釜(98)が出土している。羽釜は混入であろう。

4. 積穴住居S I 04

造構(第13図) 調査開始当初からA G49とその周囲に住居跡の存在を確認していたが、床面まで水田造成時に削平されていたうえ、暗渠S D02と排水路工事によって多くが失われ、プランの検出はできなかった。床面上には焼土と炭が散布し、その広がりが、工事用切り込みの土層断面と暗渠S D02の掘り方底部のA I 49に認められた。カマドの延長線上にあり、S I 04の北東隅にあたる。カマドは上部が失われ、厚さ5cmの焼土と、その左右にカマドの石の据え付け痕が認められたにすぎない。80×80cm程度のカマドがあつたものと思われる。カマドに接して長軸1m、幅60cmの浅い凹みS K01があつたが、貯蔵坑とするには位置と深さから疑問が残る。床面は黄褐色粘土上で固めており、カマド前面部分がよく残されていた。また柱穴はP₁がある。-10cmとやや浅いが他に候補がない。復元できるプランとの関係で、他の主柱穴3個のうち2個は排水路工事、他の1個は暗渠S D02の掘り方でそれぞれ失われたものと思われる。

以上から本住居は主軸方位N22°Wのカマドを北壁に持つ方形または長方形の積穴住居とすることができる。おそらく焼失住居であろう。

遺物(第23図) カマド(1・5・11)とその前面の床面(4・15)、P₁付近の浅い掘り込みS K01(2・3・6~10・12~14・16~21)及びS D02掘り方底部から出土したが大部分はS K01出土である。須恵器壺A(1)・壺B(9・10)・壺C(2~8)・壺蓋(11・12)、黒色土器壺(13)、土師器北信型壺(15~20)・越後型壺(21)・小型壺(14)がある。須恵器壺類は器高4cm以上である。黒色土器壺にはラセン暗文がある。

5. 壁穴住居 S I 05

遺構（第14・16図）壁穴住居 S I 01の東寄り A H46とその周囲に検出された。壁穴住居 S I 06・S I 07と切りあい関係にある。つまり S I 05の東南隅から東壁部分は黄褐色粘質土をブロック状に多量に含んだ S I 06の黒色埋土を、また北辺部では S I 07の大半をそれぞれ掘りこんで構築している。しかし、住居の西辺部の一部と西北隅は排水施設の建設によって失われていた。S I 05の堆土上は黒色土であり、堆土内には少量の焼土と炭を含んでいた。

住居のプランは主軸方位がN12° Wで、規模は350×315cmの隅丸長方形で、石組カマドが東南隅にある。壁は南壁が比較的良く残り壁高は15cmであるが S I 07側は低い。柱穴は主柱穴4本からなると思われるが P₁と P₂のみが検出されたにとどまり、北西柱穴は排水施設工事で失われ、南東柱穴は S I 06の埋土内にあり、検出できなかった。P₁は直径25cm、深さは-14cm、P₂は直径18cm、深さ-9cmである。P₃は直径25cm、深さ13cmであるが2段状となり、形状から柱穴とは思われない。P₄は直径20cm、深さ9cmの柱穴であるが、P₂と組み合わせた場合、カマドとの位置関係で主柱穴の一部と思われない。また南壁中央の壁外にP₅、西南隅壁外にP₆がある。P₅は直径25cm、深さ-20cm、P₆は直径20cm、深さ-19cmである。ともに S I 05に付属するものと思われる。S I 02の壁外柱穴と同様のものと思われる。床面は黄褐色粘質土を掘りこんで構築されていたが、全体に軟弱である。

カマドは石組みカマドで、石組みとわずかに石組みを始めた粘土が残されていた。東南隅に「L」字型に割り石を含む安山岩の川原石を組んだもので、極めて特異な形態であり、石川県内のオンドル施設と呼ばれるものに類似する（望月2000）。焚口部は西側に向いて、幅は内法で30cm、東壁までの奥行きは60cmである。煙り出しは南壁に設け、その距離は30cmである。なお煙出し部は検出されなかったが、壁外に一部焼けた痕跡があるところからすでに削平で失われたものと思われる。

遺物（第26~28図）カマド内（99・100・103・108・110・112・114・116）と床面（104・105・107・109）以外は埋土内から少量出土した。須恵器壺C（112・113）・長頭瓶（116）、土師器壺C（99~101・114）・盤B（102）・越後型甕（106・107）・小型甕（108・115）、黒色土器塊A（103）・塊B（104・105）・壺C（109~111）がある。須恵器壺Cは胎土が瓦質であり土師器杯Cはヘラミガキを省略するなど10世紀以降の特徴をもつ。尚、砥石小片と磨製石斧（151）がカマド内から出土したが後者は縄文時代のものである。

6. 壁穴住居 S I 06

遺構（第18図）S I 05の下層に検出された本遺跡で平面形の分かる実存した唯一のものである。旧斑尾川（S D 16）の西岸近くにある。やや北壁が西北隅で張り出した台形状の平面形となる。主軸方位はN25° Eである。南北方向に長軸があり、西壁で3.45m、東壁で3.65m、東西方向で3mである。壁は黄褐色粘質土をほぼ垂直に掘り込んで構築されている。

S I 06の埋土は黄褐色粘土ブロックを多量に含んだ黒色土で壁外から落ち込んだ状態で厚く堆積し、住居中央部にはレンズ状に炭・焼土を含んだ黒色土を挟む。床面近くの黄褐色粘土ブロックは1m以上にも及び軟弱な床面の検出は困難であった。このため固い壁面の追求とともに併行して調査をおこなった。壁高は検出面から35~40cmである。

かように埋土は、黄褐色ブロックを多量に含んだ黒色土であったため、検出面での識別は容易であった。さらに旧斑尾川東岸寄りは検出面全面に旧斑尾川から S I 06にかけて黄褐色砂質土が堆積していた。これは S I 06の東辺まで達していたことになり、旧斑尾川の堆積終期にはすでに S I 06はほとんど埋まっていたことになる。逆に云えば S I 06は旧斑尾川が川として機能をしていた時に、その東岸に構築されたことになる。また、S I 06は埋土の状況からかなり短期間に旧斑尾川の氾濫によって埋没したものと思われる。

カマドは焼土・炭層の在り方から北壁中央に設置されていたものと考えられる。カマドに使用されたと思われる小型の角のとれた割り石と少量の焼土の存在からも想定できる。ただし、石のすえつけ状態は明らかにし得なかった。

柱穴は4箇にある。この部分には深さ5cm程度の浅い方形状の落ち込みがあり、そのほぼ中央に径20cm、深さ10cm前後の柱穴があった。ただし掘り方はない。問題はこの方形状の落ち込みをどう理解するか、浅い柱穴とともに前例がないだけに、建物構造も含め今後の課題としなければならない。

遺物（第23・24図）床または直上からは須恵器壺C（23・24・27）・壺B（30）・横瓶（36）・壺（40）、土師器壺C・北信型壺（39）があり、遺物は少ない。住居跡埋土からは黒色土器塊（22）、須恵器壺C（25・28・29）・壺B（31・35）・蓋（32～34）、土師器壺C（26）・壺（41）・小型壺（37・38）がある。これらのうち、黒色土器塊Bや土師器壺Cは混入であろう。

7. 積穴住居S I 07

遺構（第14図）積穴住居S I 05の構築と排水路工事によって大半が失われ、北東隅と北西隅のみ検出されたものである。削平も著しく、カマドなども不明である。わずかに残る遺構の1部から北壁部が3.3m、主軸方位N10°Eの方形または長方形の積穴住居跡と判明した。壁高も7cmと低いが削平が著しいためである。北壁に接して、直徑15cm、深さ5cmのピットがあった。

S I 07からの出土遺物はなかったが、遺構の切り合い関係からS I 07が最も古く、ついでS I 06、S I 05の順で新しくなる。

8. 積穴住居S I 08

遺構（第19図）積穴住居S I 02の北方にあり、C T 70とその周辺で検出された。平安時代の住居群のもっとも北寄りの住居跡である。しかし、水田造成による削平が著しいうえに、土坑S K04、暗渠S D10、S D15の南北溝と試掘用小グリットなどによって破損が著しく、かつ湧水もあり検出が困難であったため、周辺部も含め6本のサブトレーンチを設定した。

北壁と西南隅、南東隅を含む南壁、東壁中央のカマドを検出した。とくに西壁はS K04、東壁はS D15によって大部分が失われていたが、主軸方位N30°Eの南北2.7m、東西3.0mの隅丸長方形の積穴住居である。床面は黄褐色粘質土と礫を多量に混じえた黒色土であり、湧水のためか軟弱であった。埋土は黒色土であるが1部に炭や焼土を含んでいた。壁高は検出面から10cm前後である。柱穴は床面上にP₁～P₅、北壁外にP₆～P₈があった。P₅は径32cmで、深さ5cmと浅く、埋土内から土師器壺片が出土した。位置からP₆・P₇ともに別に考えるべきものと思われる。

柱穴はP₁・P₂で、他は土坑・溝によって失われていた。P₁は深さは床面から37cm、P₂は10cmである。P₂は深さが不足するが、この部分の地山は礫を多量に含み非常に固く、これが深度不足を補ったものと思われる。

南壁にそってほぼ中央にP₄・P₅がある。ともに柱穴径は20cm、深さはP₅が33cm、P₄が42cmで、主柱穴の補足柱であろうか。

カマドは石組みと思われるが、すでに抜き取られ、据え付けの痕跡も認められなかった。焼土は50cmの範囲内にあり、厚さ最大4cmでカール状に見られた。

遺物（第27図）黒色土器塊A（117～119）・壺B（120）、須恵器壺C（121～123）、須恵器北信型壺（125～129・131）・越後型壺（130）・小型壺（124）がとくに西壁ぞい床面とS K04埋土から出土した。この掘り込みは、埋土内には焼土を含むS I 08埋土を混じえていた。須恵器壺Cは胎土が瓦質で軟らかく焼成が悪い末期のものである。

9. 穫穴住居 S I 09

遺構（第20図）B区南西隅でS B01と重複して検出された。上部は削平され周溝の1部が検出されたにとどまる。N190°Eの方または長方形プランであり、出土遺物はない。

10. 溝S D01

遺構（第9・10図）A H51からB M50にかけて検出された平安時代前半（9世紀）の東西溝である。幅50cm、深さ25cm前後で、長さは11.5mである。断面箱型で埋土は黒色土である。

遺物（第24図）黒色土器坏（塊）（42・43）、盤A（45）、須恵器坏C（46～48）、坏B（49・50）、土師器小壺甕（52）がある。須恵器坏類は焼成良好く、坏Cは箱型に近く9世紀代の特徴を示している。S D01の西側埋土内出土が大半である。

11. 溝S D04

遺構（第10・15図）竪穴住居跡S I 03の東南隅から傾斜にそって南に伸びるS I 03に附属した排水施設と考えられるものである。幅30cm深さ20cmで長さは3mにわたり検出された。断面形はU字状である。埋土は黒色土である。

遺物（第25・28図）埋土内から須恵器坏C（57～59・61・62）、長頸瓶（60）、須恵器壺片（136）、土師器北信型甕（63）、北武藏型甕（64）が出土した。須恵器坏Cは硬質、青灰色（59・62）、硬質・瓦質で灰色（57）と軟質・瓦質で黒斑のある暗灰色のもの（58・61）がある。器高も4cmを上限としてそれ以下であり、9世紀中葉をさかのぼらない時期のものであり、S I 03と同一である。北武藏型甕は胴部中央から下部を持ちヘラケズリして器壁をぐく薄く仕上げている。内面にはハケやカキ目が認められる。胴部形態は北信型甕に近い放弾形であり、ハケ、カキ目手法をとる所から、北武藏型甕と北信型甕の折中型と呼ぶべきものであり、包含層からも相当量の破片が出土している。

12. 旧斑尾川跡S D16

遺構（第9・21・22）現斑尾川と竪穴住居跡S I 06の間、東西方向にある。調査区（A区）東北隅から、西南方向にかけて、旧河川の西岸とA・Bの2本のトレンチによって、その深さ及び埋土の状態を調査した。西岸と埋土の状況から、旧斑尾川は、A区北半では現斑尾川と同様に南流し、S I 06の南で折れて西流する。深さは現地表下1mで疊層に達している。疊層が河床の1部であるとすれば、さして深い川ではなかったことになる。幅は東岸が未検出のため不明であるがBトレンチの土層図（D-D'）では、この部分も河川埋土の状態を示すところから10mを越えることになる。比較的高低差の小さいこの地域では、旧斑尾川も現在と同様に蛇行しながら南流していたため、川幅は比較的広かったと云える。旧河川の埋土の基本層序は表下に黄褐色砂層・黒色粘質土・灰色砂・疊層の順であり、帯水状態の中で旧河川が埋没していったことを示している。

旧斑尾川の埋没時期はS I 06埋土上部が黄褐色砂層に包われていることからS I 06埋没後である。また河床の疊層上部から9世紀代の土師器や須恵器片が出土していることから、旧斑尾川の埋没は9世紀代以降のことである。つまり、S I 06をはじめ9世紀代の村落が展開していた時には、旧斑尾川は蛇行しながら南流していた。しかし、S I 06が埋没した後に構築されたS I 05をはじめとする10世紀代の集落展開時には、旧斑尾川は他地域に移動していたことになる。

遺物（第24・28図）旧河川跡から、AD44附近の東岸近くの黄褐色砂層下の黒灰色粘質土から土師器・黒色土器・須恵器（134）、灰釉陶器（146）がコンテナ半杯分出土した。大部分が細片であるが、いずれも9世紀代のものである。また、疊層上部から出土した須恵器壺片（140）も同様であろう。灰釉陶器皿は高台断面形が四角形であり、黒笠14号窯期のものである。

以上、出土土器は旧斑尾川埋没の時期を示す有力な資料である。

第2節 中世以降の遺構と遺物

1. 掘立柱建物

B地区に多数の柱穴と思われるピット群が検出されたが、掘立柱建物としてまとまるものはB153とその周辺の掘立柱建物S B01とその北側のB K55とその周辺の掘立柱建物S B02である。

掘立柱建物S B01 (第20図) N30°Eを主軸とする南北棟で、東西2間、南北2間以上になると思われるが、1×1間かも知れない。東西の柱間は220cm、南北140cmである。掘り方は梢円形で、埋土の多くは黄褐色粘土をブロック状に混じえた黒色土であり、柱穴(柱痕跡)内埋土は漆黒色土である。掘り方の深さは64~30cmとバラツキがある。柱穴は径20cmである。

掘立柱建物S B02 (第20図) 衍行3間・梁行2間の東西棟(E24°S)と思われ、柱間は130cmで等間である。妻部分は排水施設で失われている。掘り方は方形で一辺40cmのものが多い。埋土は黄褐色粘土質上がブロック状にまじえた黒色土で柱穴(柱痕跡)埋土は漆黒色粘土質であり、ひとつの掘り方内には三角形状の柱残欠が残っていた。

以上2棟の掘立柱建物の年代を直接知りうるものはない。しかし、平安時代のS I 03床面に穿たれたP₁₃掘り方内から中世の内耳土鍋片が出土しており、B地区内の掘立柱建物は中世と思われる。掘り方の規模と形態、埋土の状態からも中世のものとしてよいと思われる。

2. 溝

溝S D02 (第9・13図) S I 01・S I 04から斑尾川に向う東西暗渠である。幅70cm、深さ15cmの溝掘り方にこぶし大以下の砾を充てんしていた。溝掘り方底部には深さ5cm前後の幅が不規則な小溝があり、黄褐色砂を満たしていた。明らかに暗渠に流水があったことを示している。工事用暗渠施設より東側では砾は削平されて、この流水痕跡を留めた小溝のみであった。

S D02は1部が堅穴式住居S I 01の埋土上部に構築されており、その時期は近代以降のものであろう。

遺物(第24・28図)は須恵器壺C(53)・壺片(137)と北武藏型壺底部(150)各1点が小溝内から出土した。出土地点からS I 04に伴うものと思われる。

溝S D03 (第10・21図) B M60からB Q58にかけて、12mにわたり検出された農業用暗渠である。幅40cm、深さ50cm前後であり、埋土は黄褐色粘土ブロックを多量に含んだ黒色土である。溝下部には丸太材や枝などのソダを多量に入れていた。昭和30年代に構築されたものである。

溝S D05 (第10・20図) B I 53からB K55にかかる溝幅40cm、深さ10cmの小溝である。埋土は黄褐色粘土の小ブロックを多量に混入した黒色土で北側は削平されていた。出土遺物はなく時期は不明であるが、掘立柱建物S B01・S B02の柱穴に切られていた。おそらく近世以降のものであろう。

溝S D06・S D07 (第10・21図) S D06はB K57とその周辺に検出された溝幅1m、深さ30cm前後である。溝底部埋土は砂質土で流水の痕跡が認められた。埋土内から寛永通宝鉄銭が1点出土した。江戸時代の農業用水路と思われる。

S D07はB N52附近に2mにわたって検出された東西溝で、幅30cm、深さ10cmと小さい。埋土は黄褐色を帯びた黒色土で近世以降のものと思われる。

溝S D09・S D10・S D11・S D14・S D15 (第11・22図) C地区に検出された排水用暗渠であろう。S D14は東西に、他は南北方向にある。幅50cm、深さ10~20cmであり埋土は黄色を帯びた黒色土(表土)で、近世以降の

ものである。S D09は工事用暗渠で1部に土管を埋設していた。

溝S D08・S D12・S D13（第11・12図）いずれも水路跡であり幅は一定しない。埋土は砂利または黄褐色砂である。S D13は弧状に検出され、溝の両側には護岸用の杭列があった。堆上からは板材の1部や漆器の縞片が出土した。S D08は最近まで使用されていた水路跡である。S D12は埋土が疊まじりの黒色土で堅くしまっており、近代以前の自然流路跡である。

第3節 包含層出土の遺物

1. 縄文時代（第28図）

中期後業の深鉢口縁部片（132）、黒曜石製無柄石鏃1点とS I 06埋土出土の小型磨製石斧1点（151）がある。石鏃や土器片は旧庭尾川右岸寄りの埋土から出土した。このほか、右岸埋土内から黒曜石製の縞片が数点出土した。縄文時代の遺物は他にない。

2. 平安時代（第25・28図）

土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。いずれも縞片が多い。A・B地区から大半が出土し、C地区はごく僅かである。

食膳具 土師器壺B・壺C、塊B、須恵器壺A・B・C、黒色土器壺C、塊A・B、盤A・B、灰釉陶器塊・皿などがある。

上師器壺Cは善光寺平では10世紀以降に一般化してくる食器であり、ロクロ成形され、内面を鏡で磨くものとロクロ痕のみのもの（65）とがある。塊B（72・73）は灰釉陶器をコピーしたものであり、足高台である。

須恵器壺は底部をヘラ切りされる壺A、高台の付く壺Bと糸切り痕を残す壺C（66～68）がある。壺Cは善光寺平では8世紀後半に出現し9世紀代では姿を消す。硬質で焼きのよいものから、軟質で胎土が瓦質のものなどあるが後者が多い（66～68）。これは9世紀中葉以降多くなり、黒斑を持つ素雜品が加わる。隣接の上水内郡や札村の前高山窯跡など磐山窯跡群の製品（笠澤他1986、小柳他1992・横山1998）と共にするところから、その製品である可能性が強い。

黒色土器塊B（69～71・149）皿B（148）、盤A・Bもまた灰釉陶器をコピーしたものである。高台断面が三角形状となる塊Bは灰釉陶器光ヶ丘窯型式以降の器形をコピーしたもので9世紀中葉をさかのほり得ない。塊Aは無台の塊でこれは須恵器の素譜に連なるものであろう。皿Bは外表面を黒色処理している。なお148・149はB J 52ピット内出土である。

灰釉陶器はそう多くない。塊B、皿Bに長頸瓶がある。塊B（74・145）は灰釉をハケ塗りした光ヶ丘1号窯型式のもので、145は口縁直下までコテを入れ回転ケズリしている。皿B（75・76・147）もハケ塗りしており光ヶ丘1号窯型式であるが、76は胎土内に石英細粒を微量含み、胎土から猿投窯か篠岡窯産と思われ、折戸90号窯型式であろう。底部は鏡で丁寧に削って調整されている。皿Bの146は胎土が墨灰色で長石・石英細粒を微量含んでいる。四角形高台で猿投K-14窯型式で、善光寺平でも数少ない例であり、9世紀前半のものである。このように田中下土浮遺跡では善光寺平では数少ない古い型式の灰釉陶器が見られる注目される。

煮沸具 煮焚用の土器はすべて土師器甕（鍋）である。

大甕甕は胴部が倣彈形で底部は丸底である。粘土紐を巻き上げたのち胴部上半から口縁部にかけてロクロでナデ、胴部下半はケズリ、叩いて（141、142）整形する。口縁端部が内傾する越後型（80～82）と丸まる北信型（79）がある。内面にはハケ目やカキ目を残している。また、胴部下半から底部にかけて器壁を薄く仕上げる北

武藏型（64・150）は内面にカキ目やハケ目を残し、口縁部はロクロ成形するなど北信型との折衷型式である。小型壺（77）はロクロ成形されカキ目を内外面に残している。

貯蔵具 須恵器長頸瓶（78）灰釉陶器広口瓶（84）、須恵器壺（83・133・135・138・139）がある。平底（83）と丸底がある。口縁端部を多角形状に肥厚させ波状文を三条描く壺（133）は北信地方に多い。また内面に平行叩き目と青海波を加えた叩き目（139）は北陸地方と関係があるものと思われる（笠澤他1986）。

以上包含層出土の古代の土器類は9世紀前半から10世紀代のもので、堅穴住居跡など遺構内出土のものと同様である。

ここでは9世紀初頭から後半を田中下土浮遺跡Ⅰ期、9世紀末から10世紀代の上器を田中下土浮遺跡Ⅱ期としてとらえておきたい。灰釉陶器光ヶ丘1号窯型式はⅠ期に入る。

3. 中・近世（第28図）

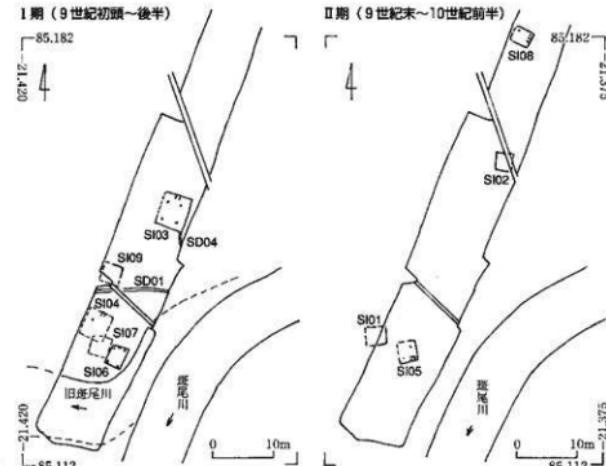
絵図が多く図示できないが、内耳土鍋（S I 03内P. 13出上）、青磁碗（144）、染付陶磁器と地元産の擂鉢（143）がある。青磁碗は輸入陶磁器で16世紀代で他は18世紀代後半期以降のものである。

第4節 平安時代の集落構造と変遷

1. Ⅰ期の集落構造（第4図）

田中下土浮遺跡では水田造成と道路工事前の先行工事などにより遺跡の削半が著しく、堅穴住居S I 05・S I 06・S I 08を除いて、各住居跡は床面のみを残すことにどまっていた。加えて石組カマドは後述の理由もあって、S I 05を除いて石組カマドの石は抜きとられ、火床を残すだけであった。しかし、周溝・床・柱穴・火床などにより、住居の平面形の把握はほぼ達成できた。

I期（9世紀初頭～後半）の堅穴住居はS I 03・S I 04・S I 06・S I 07の4棟である。平面形が分る堅穴住居はS I 03・S I 06の2棟であり、平面形は長方形で北壁にカマドが設置されている。S I 04も規模は不明であるが北壁にカマドがあり、S I 03などと共通する。S I 06はカマドの規模は不明であるが、やや胴張りの長方形プランである。これらの堅穴住居の主軸方向はS I 07が10度、他は20度前後東に偏している。S I 09も主軸がN19°Wであり、このグループに属すると考えてよ



第4図 田中下土浮遺跡における平安時代集落の変遷（1:800）

い。

このようにⅠ期の堅穴住居は主軸方向が東に20度前後偏した方または長方形プランで、北壁にカマドを設けていたかなり規格的な建物としてよい。このことは出土遺物からの検討とも矛盾しない。ただし、S I 07・S I 09は明確は伴出遺物はないが、S I 07はS I 05との切り合い関係からⅠ期に属するとしたが、位置がS I 06に接しすぎる所から、Ⅰ期の中でもS I 06に先行して構築されていた可能性がある。S I 03は2回以上の建て替えが予想されるので、S I 07は創建期のS I 03と同時併存したものと思われる。

S D01はⅠ期に属する東西溝で、出土遺物からⅠ期のうちに埋没したものと考えられる。Ⅰ期の住居群を南北に区画する区画溝と思われる。したがってⅠ期の建物群は、未調査地に多くの住居群の存在が予想されるので、確かなことは云えないにしても、少なくとも溝S D01で南北に区画された南・北2群の住居群からなるものと思われる。各住居に規格性がある所から、田中下土浮遺跡の古代集落は9世紀代に旧斑尾川右岸の微高地に計画的に形成されたものと思われる。おそらくその背景には「芋川庄」(小林・欠野他1981)と密接な関係があるものと思われるが今後の課題である。

なお、カマドは石組みであったと思われるがⅠ期の各住居跡ではS I 04に見られるように、痕跡を残すだけで石組は認められなかった。これは削平によるだけないことが削平を受けなかったS I 06にも明確なカマドが見られなかつたことから理解できる。この地域には石組カマドの素材となる転石はほとんどないことを併せると旧住居のカマドから石を抜きとり、新住居構築の際に再利用された結果であると思われる。このことはⅡ期の住居についても云える。

2. Ⅱ期の集落構造

Ⅱ期(9世紀末~10世紀)の堅穴住居跡はS I 01・S I 02・S I 05とS I 08の4棟がある。このうちS I 01とS I 02のカマドは未調査地区にあり不明で、S I 05とS I 08から住居構造が分る。

平面形は方または長方形で規模は全体としてⅠ期の住居より小さい。主軸(長軸)方向はS I 08のN30°Eを除いて、ほぼ真北方向(S I 01、S I 02)か、10度東にずれるだけである。S I 08の主軸方向はむしろⅠ期に共通するが、他は大きく異なる。カマドは確認できたS I 08とS I 05によれば東壁に設けられており、この点でもⅠ期と異なる。ただし、S I 05は特種な「L」字型カマドで煙道部は南壁に設けられているので、東南隅の設置ということになる。S I 08のカマドの石も抜き取られており、S I 05が本遺跡で検出し得た唯一の石組カマドである。出土遺物からもS I 05出土土器は田中下土浮遺跡ではもっとも新らしく10世紀代前半のもので、石組みが残ったことの意味は、この地での新住居の建築は終了したことを意味し、S I 05が最後の堅穴住居のひとつといえる。S I 08は住居の主軸方向と石組の抜き取りが見られるところからⅡ期でもより初期のものであろう。出土土器にもその傾向が読みとれる。

このようにⅡ期の集落は旧斑尾川の氾濫などによって消滅したⅠ期からの南住居群(S I 06など)の占地にS I 01、S I 05が順次構築されるとともに北住居群にはS I 02が、そしてさらに北にS I 08が作られる。住居群の分布状況で見れば集落の拡大を意味するように見えるが、予想される集落内の一帯の調査であったとすれば、拡大現象であると一概に断することはできない。

また、集落をとりまく環境はⅠ期と旧斑尾川の河道の変化に伴い少々異なっていたであろう。しかし、IH斑尾川と現行斑尾川とはほぼ平行関係にある所から、そう大きな変化ではなかった。

以上からⅡ期の集落は南北を区画する溝も消滅しており、住居や集落の計画性が薄らいで来ていることを示している。

そうした中でS I 05に見られる「L」字型石組カマドの存在は注目される。県内では類例がなく、もし、北陸

地方などのカマドと関係があるとするならば、きわめて重要である。かつて東筑摩郡麻績村野口遺跡の堅穴住居床面に焼けた溝があった所からオンドルの存在を主張されたことがある（綿出1993）。「L」字型石組カマドが北陸地方をはじめ西日本で云われるよう 「オンドル」施設（望月2000）とすれば、北陸地方との関係を考えなければならないし、半島系渡来人との関係もあらためて大きな課題となる。從來から善光寺平と頸城平野との関係は土器等に共通性がある所から善光寺平と頸城平野との密接な関係は多くの研究者が説いてきた（板井1990）所であるが、「L」字型石組カマドの存在も含め、今後の大きな課題とされなければならないものと思われる。ただし、小松市額見町遺跡のオンドル状遺構は7世紀代のもので、本遺跡のそれとは3世紀前後の時間差があり、両者を結び付けるには若干の躊躇を感じる。加えて北陸地方では平安時代には堅穴住居は消滅し掘立柱建物となつており、ここでは問題提起としておきたい。

田中下土浮遺跡の古代集落はⅡ期の集落を持って終了したかどうかもこれからの課題であるが、少なくとも調査の所見ではS105を持って終了したことを示している。

第4章 芋川氏館跡の調査（第3次）

第1節 遺構と遺物

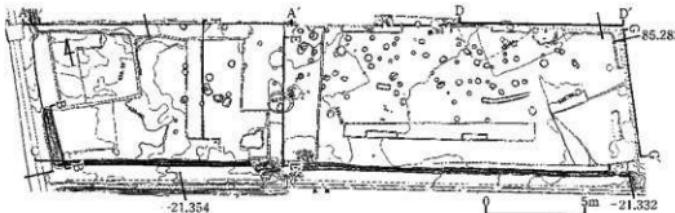
1. 基本層序

遺跡は中世において芋川氏館構築に伴う大規模な土地造成をおこなっており、自然の地盤は大きく改変を受けている。加えて芋川館跡が廃絶されたあとの土地利用と現代に至るまでの水田造成や最近の盛土などで調査地内の地層は調査地点によって複雑さが予想された。したがってトレンチを調査地の北側（土層A—A'・D—D'）南側（土層C—C'）西側（上層B—B'）東側（土層G—G'）中央（上層E—E'・F—F'）にそれぞれ設置して土層観察をおこなった。ただし、南側と西側は土手斜面を削平しての調査であった。この他必要に応じてサブトレンチを入れた（第5図）。以上トレンチの土層観察の目的は造成前の旧地形や造成による整地面の把握、土壌の存在の有無、堀と土塁との関係、芋川氏館跡の土地利用などいくつもの課題にせまろうとしたものである。なお、グリット設定は第1・第2次調査に順じている（第2図）。

調査地内の基本層序（第36-37図）は、上層より、耕作土で帯黄色黒色土（1層）、ついで水田床土上に見られる鉄分集積層（褐色土）が水平に堆積（2層）し、以下、帯黄色黒色土（3層）、黒色土（4層）、黒色粘質土（5層）が続く。4・5層は場所により円錐を少量含む。また黒色土は部分的に褐色を帯びるが、層としては1体のものであり、4層と5層間も漸移的である。

この黒色土には場所により、地山を構成している黄色粘質土（粘土）をブロック状に含んだ黒色土（6～9層）がレンズ状あるいは塊状に含む。6～9層を含む黒色土が芋川氏館の造成土であり、調査地の西端側が50cm前後と厚く、東北寄りは認められない。地山である黄褐色粘質土（10層）の上面は東北隅では海拔538.10m、西南隅では538.30mで比高差が20cmある。第4層も同様の傾向にある。つまり、東北辺の高所を削平し、西南辺の低地へ盛土をして造成したことを示している。そして造成に際して堀の堀削で得られた黄褐色粘土（青灰色のグライ土壤の酸化粘土）をmajiedたものであろう。すでに第1次、第2次の調査報告書で指摘したとおり、芋川氏館は北から南に伸びる馬の背状の丘陵とその東西にある旧淀尾川の開削した低地をたくみに利用して、丘陵部に館を、東西の低地に堀を構築されていたことの証明となる（笠澤・池田・森2003）。

遺物の出土状態もこのことを示している。近世の陶磁器は第3層に、中世のそれは主として整地土層上部（4層）から出土し、古代、繩文土器の主体は第4層下部からの出土である。



第5図 芋川氏館跡（第3次）土層配置図（1:250）

2. 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺物は前回調査時に少しあるが、調査地全域の西堀埋土から出土していた。今次調査では遺構の検出も期待されたが、西堀埋土と同様に縄文時代前期前半と中期後葉の土器類と石器が出土したとどまる。

縄文時代の遺物の多くはグリットSラインより東側で38ラインより北側の黒色土（4層）下部からの出土である。この部分は丘陵地形の中でもっとも高所にある。なお、前期と中期遺物は混在して出土した。

前期初頭の土器・石器（第38図1～22、第41図7） 繊維を含む繊維土器（1～14）と無繊維土器（15～22）がある。前者の多くは繊維を多量に含む。文様は紺縄文・羽状縄文でいずれも単節であるが、無節のもの（14）もある。1は端部を欠く口縁部片で墻面を垂下させている。12・13は粘上が良選された燃り系文土器である。無繊維土器では15・21・22は無節である。繊維土器と異なり石英や高温石英、白色粒を多く含んでいる。第2次調査では丸底部分が出土している。中道式土器と呼ばれる1群であろう（児玉1984）。

石器（7）には特殊磨石とも呼ばれる磨石がある。断面三角形の一面上にすり面がある。石英斑岩製。

中期後葉の土器（第38・39図23～46） コンテナ2箱分が出土したが、器形の分るものは少ない。墻面圧痕文（24～30）、ワラビ状の太い沈線文（32・44）、列点文（31・32）、重山形沈線文（「ハ」の字状文）（41・45）などがあり、これらのはとんどが太い沈線で区画された巾を縄文で充てんしている。胎土内に流紋岩片や高温石英・水晶片や角閃石を含ませたものが目立つ。善光寺平の縄文中期後半の土器編年では大略後葉Ⅲ期にあたるであろう（水澤2000）。

中期後葉の石器（第41図1～6・第43図10） 打製石斧（1～5）・磨製石斧（6）・大型の多孔の凹石（10）がある。打製石斧はいずれも欠損しているが先端には使用痕が認められる（1・2）。粘板岩製であるが4は凝灰質である。磨製石斧は全長16.5cmで先端が欠損している。頂部にはすり面が認められ、磨石として兼用している。刃部には使用痕が認められる。素材は火成岩であるが岩石名ははっきりしない。多孔の凹石は安山岩製で34×31×18cmの大形の川原石の全側面に24個所に及ぶ凹みがある。凹は大は6.5×5.0cmで深さ2.5cmであり、小は僅かに凹むものまである。

3. 平安時代と遺構と遺物

(1) 壁穴住居S101

遺構（第35図） A R41とその附近において検出された。しかし、中世の造成によって、壁は削平されており、火床と焼上および木炭の広がりから、カマドと床面の1部を検出したとどまる。カマドは石組カマドであろうが、全くその痕跡は認められなかった。床は黒褐色土を床面としていたが、特に硬くはなく、焼土粒と木炭片がカマドから南側1mの範囲に散布していた。柱穴・周溝も不明である。カマド附近で土師器北信型壺片2点（57・58）と床面部分から灰釉陶器皿（62・63）・塊（65）の破片が出土したことにより、カマドを北壁に持つ壁穴住居の存在を確認したことにとどまる。

遺物（第40図） 土師器北信型壺は2点あり、底部を欠く。とともに石英・雲母と白色粒を少量含んでいる。57は胴部に平行タタキがある。胴部上半から口縁にかけては粘土紐を巻き上げたのちロクロナデして成形しており、巻き上げ痕が認められる。口径20.4（57）・23.4（58）cmである。灰釉陶器はいずれも少片である。皿（62・63）は2点あり、62は底部片のみで、底径8cmで内外面とも丁寧にロクロナデされ、灰釉はハケ塗りである。高台断面は嘴状で端部が尖る。底部内面には重ね焼き痕跡がある。胎土は暗灰色である。63は口径14cmで底部を欠く。胴部下半はヘラケズリされ、内外面ともに灰釉はハケ塗りされている。とともに猿投産で黒鉢90号窯跡のものと思われる。塊（65）は底部片で底径8cm、高台は皿と同様に嘴状である。内面に灰釉がハケ塗りされている。胎土は硬質・緻密・白灰色で東濃産で、光ヶ丘1号窯型式のものであろう。

このほか、須恵器壺の小片がある(59)。口径は不明である。口縁部分は多角形状で北信窯のものと思われる。以上、遺物から堅穴住居S I 01は9世紀中頃から後半期頃のものと考えられる。

(2)包含層出土の遺物(第40図)

9世紀から10世紀代の土器が調査地全域から出土した。特に第4層下部からが多い。しかし大部分が網片で図化できるものは少ない。土師器・黒色土器と須恵器が主体で、ごく微量の灰釉陶器と1点の綠釉陶器皿がある。

土師器は食膳具・煮沸具、黒色土器は食膳具が主体である。須恵器は壺類や長頸瓶などの食膳具と壺などの貯蔵具である。601は完形の壺Cで、口径12.4、器高3.8cmの胴下半が僅かにふくらむ。黄色を帯びた灰白色で瓦質胎土でゆがみがある。66-67は長頸瓶の口縁部片で、66は口径9.8、67は10cmである。灰釉陶器は壺(64)、皿(61)・長頸瓶(68)などがあり、光ヶ丘壺型式(61・64)が最も古い。綠釉陶器皿(70)は暗緑色の釉がかけられた硬質の陶器である。口径16cmである。近江か東海地方産であろう。

4. 中・近世の遺構と遺物

(1)掘立柱建物

掘立柱建物群 調査区のA L41からA T38にかけたラインより北側で、A L41より東側に100個に及ぶ多数のピット群が整地面(4層)を穿った状態で検出された。埋土内に量の多い少ないの違いはあるものの、黄褐色粘土上を含んでいるものが多い。中には柱痕跡が明瞭に認められるものもあった。この場合に柱痕跡は黒色土で下部ほど漆黒色となり粘質化していたが、大半は識別困難であった。堀り方が小さく、柱をぎりぎりに埋め込んだ結果と思われる。同様の例は隣接する小野遺跡の中・近世ピット群でも認められた。しかし、多数のピット群から多くの掘立柱建物の存在が予想される所であったが、結果は意に反して意外に少なかった。柱筋が偏した小規模な小屋程度の建物も予想されるが、柱穴以外もあり得るであろう。

柱筋・堀り方と埋土の在り方・柱間及び建物間の空間などから5棟の建物跡を確認した。

掘立柱建物S B02(第34図) 建物群のもっとも西寄りの1×2間の南北棟である。桁行3.6m、梁行2.2mである。堀り方、柱痕跡とも40~20cm、堀り方径は30cm前後である。主軸方位はN11°Wである。

掘立柱建物S B03(第34図) 建物群のはば中央、井戸S E01にもっとも近接している。梁行1.3m・桁行2.4mの1×1間の南北棟である。主軸方位はN15°Wである。堀り方は不正円形で2ヶ所に柱痕跡がある。堀り方埋土は黄褐色粘土をまじえた黒色土で、柱穴は黒色土であるが、下部は粘質化し漆黒色土であった。堀り方径は34cm前後、柱穴は径20cm前後、深さは14~30cmである。

芋川氏館西堀と主軸方位が一致することと井戸S E01に近接するところから同様の主軸方位を持つS B02、S B03とともに館の西南隅を構成する建物群のひとつと思われる。

掘立柱建物S B04(第35図) S B03の西1mの所にある。梁行部分2間分を検出した。桁行部分は調査地外にある。梁行は等間であり、2.5mである。主軸方位はN13°Wである。堀り方は円形で径24cm前後、深さは24~42cmであり、埋土は黒色土である。

なお、S B04の東側に黒色砂層を埋土とする浅い自然流路跡があったが、中世以前のものである。

掘立柱建物S B05(第35図) 建物群のもっとも東寄りにある主軸方位N80°Wのおそらく3×2の純柱の東西棟と思われる。桁行6.6mで等間、梁行は柱間2mで恐らく6.6×4.0mであろう。堀り方はほぼ円形で径25cm、柱穴は15cmと他の建物群に比較して小さい。1部堀り方の底部に柱が残っていた。堀り方は黄褐色粘土をブロック状に含む黒色土であり、柱痕跡は粘質化した漆黒色土である。深さは25~60cmとバラツキがある。S B03、S B05と重複関係があり、これらの建物跡と時間差がある。主軸方位、堀り方などの相違からS B02などの南北棟より後出であろう。南北棟が、芋川氏館跡の堀の方方位(N15°W)とはば一致するのに対し、S B05のみ45度近

く異なる。S B04と直接の切り合い関係はないが、館跡内の建物配列としては不合理であり、恐らく館の機能が失われた18世紀後半頃の建物と思われる。

据立柱建物跡 S B06 (第33図) S B03・2 B04・S B05と重複する。主軸方位N20°Wの南北棟で、梁行は3.3mであり、柱間は1.8、1.5mである。掘り方は円形で40cm前後と大きい。掘り方埋土は黄褐色粘土質土をブロック状に少量含む黒色土で柱痕跡埋土下部は黒色粘土質土である。掘り方の深さは40cm前後である。主軸方位がS B02、S B03、S B04と異なり、しかもS B03・S B04と重複するところから、これらより後出するものと思われるが、南北棟である所から芋川氏館跡時代のものであろう。

(2)井戸・石組・集石・土間状遺構・溝

井戸 S E01 (第36図) S B03の南方にあり、近接して小規模な石組みであるS X11がある。

S E01は、130×106cmの楕円形の素掘りの井戸である。深さ95cmで底部中央で東壁に接して、45×35cmの楕円形の水留め用のビットがあり、深さは30cmである。井戸は整地層を掘り込み埋土は黄褐色粘土質土を多量に含んだ黒色土である。埋土の堆積状況から廃絶後一気に埋め立てたものと思われる。埋土中位から2点の珠洲焼の要片(52・54)が出土した。したがって、埋め立てた時期は珠洲焼の年代が15世紀代のものであるので、芋川氏館が機能していた末期に不用となって埋め立てたものであろう。なお、水留め用ビット内は粘土質化した黒色土である。石組 S X10(第36図) 調査地の南側は東西に北高差1m前後の土手が東西に直線的に連なっていた。従来この土手が、南側の内側掘り込み面とされていたが、公民館東内隅にある館東南隅の土手より3m北に寄っており、また西堀の調査で明らかにされた南堀推定地とも合致しない所から、この土手は後世削り取られたものであることが判明していた。つまり、西堀の調査結果から見れば、公民館東南隅の土手が南堀の北岸にあたっていたからである。調査ではこの点を確認するために土手を切断したところ、石組 S X10を検出した。この遺構は南堀の存在の有無と南土塁の存在を確認する上で、きわめて重要な意味を持っていたため、この調査には特に慎重を期した。しかし、上手下は家の敷地の一部であり、現行水路の設置によって、すでに破損していた。

S X10は長さ50cm、幅20cm、高さ30cm前後の長方体の大石を2個直線的に並置させ、その大石の端から同様の大石を前方につき出す形で配石していた。南に面をそろえる形であり、背後にはこぶし人の石をあたかもひかえずみのように入れてあった。この部分の埋土は黄色粘土ブロックを少量まじえた黄色を帯びた黒土であったが、土手斜面上に検出されたために整地面との関係は十分に確認できなかった。黄色を帯びた黒色土は表土層の一部である所から、近世以降のものであろう。石組はこの部分にのみ見られる所から、近世以降の石組井戸の残欠と思われるが、定かなことは不明である。なお、この部分から多数の凹みを持つ大型の凹石(10)・石臼片(9・11・12)が出土した。

集石 S X09 (第36図) 石組 S X10に近接した西にある。整地面に170×100cmの範囲内に楕円形に50~20cm大の角砾を集めたもので、集石埋土は帶黄色黒色土であった。集石内部からは石鉢(13)と唐津焼や肥前焼(82)など18世紀後半代の陶磁器片が数点出土した。近世後期の遺構である。

集石 S X11 (第36図) 井戸 S E01埋没後に整地面を55×40cmの規模で不定形に掘り下げ、そこへ人頭大からこぶしの大川原石4個を投げ込んだもので、埋土は黄色を帯びた黒色土である所から、近世以降の遺構と思われる。当初礎石の掘え付け穴とも思われたが、他に該当するものは見当たらず、性格は不明である。

土間状遺構 S X12 (第35図) S B05の東辺部から東側にかけて検出された。ほぼS B05と同方向に黄褐色粘土質土を鑿形に配土したもので、南ライン上にこぶし大の円窪を、粘土質土にそって直線的に配石している(第35図E-E')。粘土質土は固く踏み固められていたが、スサ等の痕跡は認められなかった。S X12の北側は調査外となり不明である。なお、西北部は土坑 S K20で切られている。

土坑 S K20 (第32・37図) S X12を切っており、北側は調査外のため未調査である。径120cmの円形で深さは20cmで埋土は鉄集積層下の黄色を帯びた黒色土（3層）である。中世の整地層を切っており近世以降の造構である。

土坑 S K21 (第31図) 集石 S X01の西側にある。120×100cmの不整形で深さは18cm、埋土は黄色を帯びた黒色土で、近世以降のものと思われる。出土品はない。

溝 S D06 (第31図) ピット群の南辺に長さ5mにわたり検出された東西溝である。幅10cm、深さ5cmの小規模な溝である。埋土は黄色を帯びた黒色土で近世以降のものである。

(3) 土壘

土壘 S A01・02 (第30図) 調査地における明確な土壘跡の検出はできなかった。しかし、土壘推定地には中世の造構は全く認められないところから、逆説的ではあるが、このことが土壘の存在を示していると云つてよい。また、S E01やS B02などの建物群の在り方が逆に土壘を意識して計画的に構築されていることを示している。しかし、近世以降のS X09・S X10・S K21が、土壘推定地内にあることは、すでに近世後半（18世紀後半）には十畳は削平されていたことを示すものである。館の整地面には黄褐色粘質土を全域にわたって配土していたが、南上壘推定地にはこの粘質土は全く認められなかった。逆に西上壘推定地には粘質土を多量に配土していた。これを土壘の痕跡という指摘もあるが、企画性はなく、土壘の痕跡とするには根拠薄弱と云わなければならない。土壘の推定値は掘と中世造構群及び現存する土壘との関係から、西十畳幅は8m、南のそれは5mと推定できる。

(4) 出土遺物

中世の遺物 (第39・40図) 土師器小皿・内耳土鍋・珠洲焼壺・輸入陶磁器・国産陶器・銅錢・石製品がある。

土師器小皿（73～77）は5点出土した。ロクロ成形痕をとどめるA類（75～77）・B類（74）・C類（73）(笠澤・池田・森2003)である。A類は口径11.0cm（75）・9.8cm（76）・8.8cm（77）と大型であり、土師器小皿の中では古式の様相をとどめる。75・76は土壘跡 S A01（推定）にあたる整地層出土（A K44）であり、75は糸切底である。土壘構築の時期を示す資料であり、他の土師器小皿類に先行するものと思われる。他の土師器小皿はいずれも掘立柱建物群内の整地層出土である。73は口径7cm、静止糸切りで黄褐色であり、A O43出土である。74は口径6.7cm、黒褐色でA O41出土、77は口径8.8cm、橙褐色でA R41出土である。

土師器内耳土鍋（71・72）は掘立柱建物 S B02整地層上面出土であり、ロクロ痕をとどめる。71は小片のため口径不詳で口縁部外面に黒斑がある。雲母・白色細粒を少量含む（AM41出土）。72は半壊しており耳部を欠く。口径23.0cm、器高15.2cm、黒褐色で外面全面に多量の煤がつく。内面頭部から底部にかけ窓で斜めにナデ付けている。雲母・石英・白色細粒を多量に含む（AM42出土）。

珠洲焼は壺片が3点ある。52・54は井戸 S E01埋土中位、53は掘立柱建物群整地層出土である。いずれも15世紀末頃のものと思われる。

輸入陶磁器は10数片出土したが、いずれも細片であり、掘立柱建物群内の整地層出土である。78は15世紀前半代の青磁器片口盤で内面に2条の1対の紋様を描いている。口径23cmである。A O42出土。

国産陶器の出土量は少ない。79は掘立柱建物 S B03（A P41）整地層上部出土である。14世紀末頃の瀬戸焼水滴である。口径4.2cm

銅貨が1点出土している。青銅製である。腐蝕が進み種別・法量は不明である。掘立柱建物群内出土である。

近世の遺物 (第39・40図) 国産陶磁器及び地元産の摺鉢などの陶器類と3点の青銅製キセルがある。集石 S X09内及び調査地東南辺（38ラインより南側）の整地面上層の第3層（帶黃色黒色土）からまとめて出土した。20数片出土したがいずれも細片であり、18世紀後半以降のものである。

82は集石 S X09出土の18世紀後半の肥前焼の碗で黄灰色の釉が掛けられている。83は唐津焼の碗、85は柴付け

碗で内面に草花文がある。81は染め付けの蕪口、84は帶青灰色釉を掛けた碗である。措鉢は2点ある。地元産（赤塗焼か）と思われる陶器で55は紫灰色の釉が、56は灰褐色で18世紀末以降のものである。

石製品（第41～43図） 粉挽き臼3点と石鉢1点がある。

粉挽き臼（8・9・11・12）は上臼（9）と下臼（8・11・12）である。8のすり面は8分画である。上臼（9）は径32cmで挽き手孔、心棒孔がある。すり面は6分画である。いずれも安山岩製で敲打により成形している。石組S X10出土。石鉢（13）は口径11.4cm、器高14.3cmであり底部は平坦である。安山岩製で敲打により成形されている。集石S X09出土。以上の石製品は中世にさかのほる可能性があるが、S X09、S X10が18世紀末頃のものと考えられるので、近世の遺物としてとらえておきたい。

第2節 芋川氏館跡東南地区の建物群の性格

1. 芋川氏館の構造（第6図）

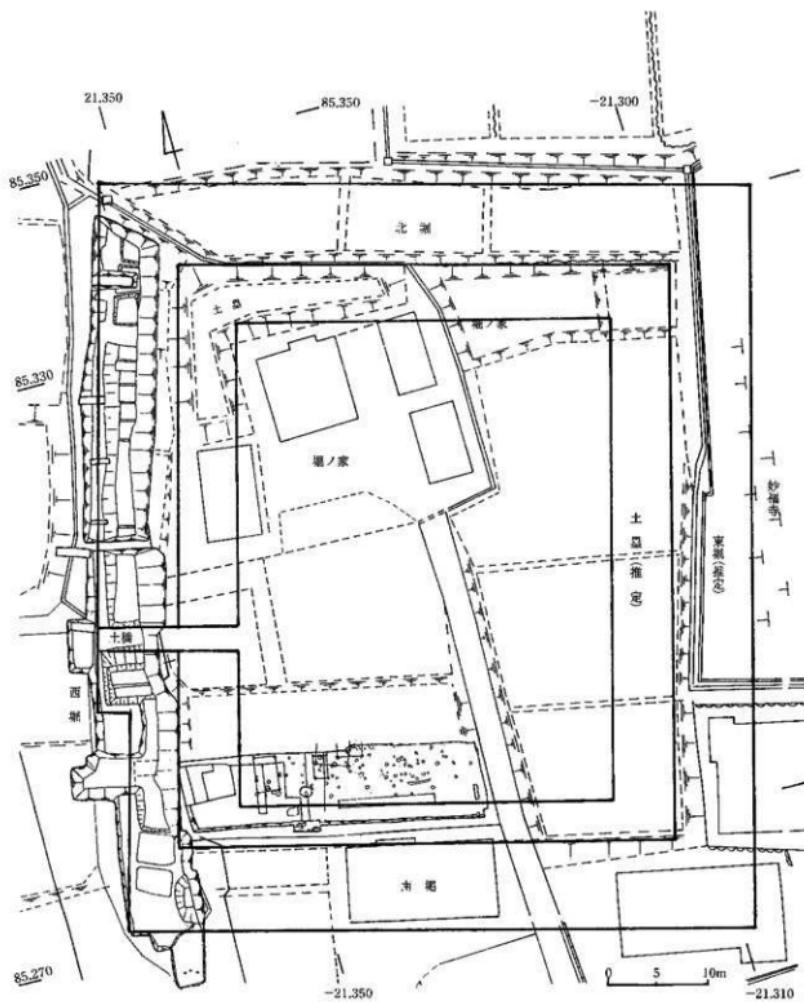
第3次調査で検出された遺構は平安時代の豎穴住居跡1と中世以降の掘立柱建物5棟を含む多数のピット群、土間状遺構1、井戸跡1、石組1、集石2、土壘（推定）2、溝1とこれらに伴う遺物である。また遺構こそ検出されなかったが、縄文時代前期初頭と中期末葉の土器と石器類がある。縄文時代は包含層そのものは存在し、平安時代以降の遺構の構築に際しても、さして影響を受けていない所から、調査地内には縄文時代の遺構は存在せず、遺物散布地ということになる。恐らく調査地に近接した場所に遺構があるものと思われる。したがって、ここでは芋川氏に關係した中世以降について調査の成果を述べ、まとめてかえたい。

さて、西堀の発掘調査と現状の地割・地形から、各堀の位置を確定し、それらによって囲まれる範囲は南北60m、東西50mとした。これに8m幅の堀の数値を加えると、南北76m、東西66mが芋川氏館の規模となる。ただし西堀外郭線（西岸）は南北幅の約3分の1の所で堀幅を6mと狭め鈎形となるので、主郭の規模は変わらないものの、堀で区画される東西幅は2m小さい64mとなる。ただし、館が対称構造をとるとすればさらに2m減じ62mとなるが、現段階では鈎形構造は西堀だけとしておきたい。さらに、西堀が鈎形となって狭くなる点までの南北間の距離は46mで、この点での東西の距離は50mで、ほぼ方形となる。したがって館が対称構造であるとすれば、この方形部分に東西48m、南北14mの張り出し部が付くことになる。つまり幅広の堀に囲まれた方形区画が主郭で、幅狭の堀に囲まれた掘り出し部が副郭ということもいえよう。なお、それぞれの郭は幅6mの土壘で囲まれるので主郭の規模は南北40m、東西38mとなる。

以上の点を踏まえて、館の西南地区の調査結果から、あらためてこの地区について検討し館の規模を考えてみる。問題は土壘の有無と規模であるが、別項で述べたとおり、幅6mの土壘S A01と幅4mの土壘S A02の存在を想定した。幅を狭めた理由は西堀の幅狭の堀と対応させたことと、後述の井戸と建物配置の在り方を考慮したからである。したがって幅狭の堀に囲まれた南辺部内部の規模は東西38（あるいは36）m、南北10mとなる。

2. 西南地区的構造と変遷（第7図）

南西地区（調査区）では南土壘に近い場所に素堀の井戸S E01と少なくとも土壘に併行した掘立柱建物S B02・S B03・S B04の3棟が芋川氏館が構築された当初の姿であったと思われる。芋川氏館の構築時期については北信地方がより戦国の様相を強める永正年間（1504～20年）と考えている（笠澤・池田・森2003）が、この点はS E01埋土出土の珠洲焼の年代とも矛盾しない。その後、井戸が埋め立てられ、掘立柱建物S B06が建てられたものと思われる。井戸と掘立柱建物はともに規模が小さい。S B03は1×1間で物置小屋、S B02・S B04は芋川氏一族のものでなく、従属者（使用人）の住まいと考えられる。井戸S E01を中心に従属者の一部が西南地区と



第6図 東川氏館跡復元図（1:500）

いうことになり、明らかに主郭にはあたらないのである。逆に主郭が館の北邊にあったことの証明になる。加えて、いつ、どのような理由で井戸が埋め立てられ、従属者の居住区としての性格を変えていったのかなど、今後の館跡内の調査を待たないとこれ以上の考察は不可能である。しかし、障子堀（池田1998・1999）で囲まれた館の規模と構造を知り得たことは今次調査の最大の収穫であった。



第7図 芋川氏館跡（第3次）西南地区の建物配置（1:200）

3. 芋川氏館の廃絶

慶長3年（1598）、上杉景勝の会津移封に伴い、芋川氏も景勝に従って、館もすたれる。出土陶器から見る限り、この地の利用は18世紀後半以降のことである。恐らく地域の人々にとって廃絶後の館跡は芋川氏の居住地としての意識が強く手を加えられることはなかったが、ようやく18世紀後半になって、土塁を切りくずし、すでにかなり埋没していた堀を埋め立て、水田化していく。掘立柱建物SB05はその頃の農家であろうか。しかし、主郭部分に相当する部分は土塁も残し、今日に至っているのである。芋川の地の人々の歴史遺産、とくに芋川氏は去っても芋川氏に対する想いは長いこと続いていたものと思われる。歴史遺産の多くがこうして今まで引き継がれてきたのである。

今次調査は改めてこのことを私たちに教えてくれているものと思われる。



井戸SE01

第5章 まとめ

今回調査した田中下土浮遺跡と芋川氏館跡は隣接した一体の遺跡である。田中下土浮遺跡は平安時代と中世の集落遺跡であり、芋川氏館跡は城館跡であって、遺跡の性格は異なるが、いくつかの共通項がある。1点目はとともに绳文時代の遺物包蔵地であることであり、2点目は平安時代の集落跡であること、3点目は中世の一般集落と居館跡であることである。

田中下土浮遺跡で検出された遺構は平安時代の堅穴住居跡9棟と溝2基と旧班尾川流路跡、中世の掘立柱建物2棟以上と近世以降現代に至る溝2と暗渠施設7基や水路4ヶ所等である。

平安時代の堅穴住居はS I 05～S I 07の切り合い関係から少なくとも2時期がある。出土土器は遺構の大小が前平を受けたために出土量が少なく、各遺構の時期決定にやや不安を残すが、大旨9世紀代(I期)から10世紀(II期)のものと思われる。

遺跡の周辺が水田地帯にあるうえ、水田造成によって地形も改変を受けていて、集落規模は明らかにしえない。しかし、旧班尾川との関係が明らかにできた。本遺跡は平安時代初期の9世紀代に旧班尾川の西岸にできた微高地上の集落跡である。I期の集落は中型住居S I 03をはじめS I 04・S I 06・S I 07・S I 09の少なくとも5棟からなる。その後も集落は10世紀代まで継続して営まれる。S I 01・S I 02・S I 05・S I 08がII期のものである。発掘調査は遺跡の恐らく、旧班尾川ぞいの西辺部を調査したとするならば、未調査地域に多数の住居跡が予想される。また、北方の隣接する芋川氏館跡の発掘調査でも住居跡の検出と多数の平安時代の土器片が出土した。住居跡(S I 01)は田中下土浮遺跡のI期のものである。この地もまた平安時代の居住域と考えてよい。さらに、班尾川を1kmさかのぼった小野遺跡でも多量の平安時代の遺物が出土し、ここもまた、居住域であった。現在水田地帯で地図の様相について知ることはできないが、恐らく班尾川ぞいに小野遺跡から田中下土浮遺跡に至る間には自然地形をたくみに利用していく平安時代の集落が存在したものと思われる。これらは、古代末期から中世に至る文献に登場する芋川荘と呼ばれる莊園経営にたずさわった農民たちの集落跡の一部であり、そのひとつが田中下土浮遺跡である。つまり、今次調査によって、今まで明らかにされていなかった芋川荘について具体像が明らかにされたことになる。

中世では芋川氏館跡西南地区の調査では堀の内側に土塁が存在したことがほぼ明らかにされ、芋川氏館の規模が明らかにできたことと、この館が長野県内で初めて検出された障子堀によって開まれた極めて防御的色彩の強いものであることが明らかにされただけでなく、館の東南地区には縁廻農民とも云うべき、芋川氏に従属した人々の居住区にあてられていたことも併せて明らかにされた。

いっぽう田中下土浮遺跡では中世の掘立柱建物群が明らかにされた。芋川氏館とそれに直接結びついた中世の歴史景観が明らかにされたことになる。豪族館とそれに付随した集落跡が一体で明らかにしたことは長野県内では例がなく、今後の中世史研究に貴重な調査例であったものと云える。

近世以降は芋川氏館跡は農民の居住地、田中下土浮遺跡では居住域から水田地帯になった。このことは多数の暗渠や溝が示している。僅かに出土した陶磁器の細片は18世紀以降であり、寛永通宝の出土もこれを裏付ける。

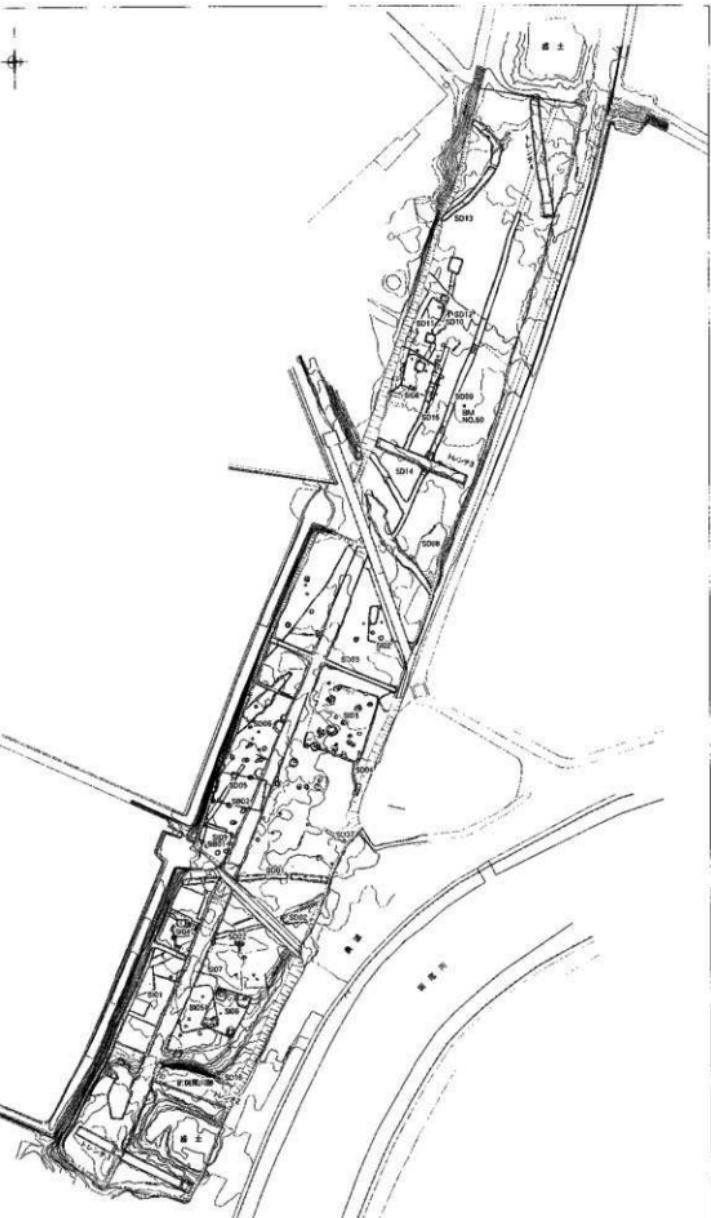
今次の2遺跡の発掘調査は從来知られなかった古代の芋川荘内部の集落構造や土地利用の在り方、戦国時代では芋川氏をとりまく地域史を明らかにする上で極めて貴重な調査であったと云えるものである。

引用・参考文献

- 池田光雄 1998 「陣子堀について」「テーマ「陣子堀」について」 第15回全国城郭研究者セミナー実行委員会 中世城郭研究会
- 池田光雄 1999 「陣子堀について（発表要旨）」中世城郭研究 第13号 中世城郭研究会
- 今佐今朝人・百瀬忠幸 1984 「錦山遺跡」三水村遺跡発掘調査報告書 第1集 三水村教育委員会
- 大久保邦彦 1979 「三水村上赤塙遺跡出土縄文中期中葉の深鉢型土器」「研究ノート3 地理研究の動向」千曲川古代文化研究所
- 児玉卓文 1984 「長門町中道一長野県小県郡長門町中道遺跡緊急発掘調査報告書」長門町教育委員会
- 小林計一郎・矢野恒雄 1980 「上代・中世」「近世」「三水村誌」三水村
- 小林 学 1976 「縄文時代」「上水内郡誌・歴史編」上水内郡誌刊行会
- 小林 学 「遺跡探査(4) 上水内郡三水村赤塙遺跡」「長野」第29号 長野郷土史研究会
- 小柳義男 1983 「上水内郡三水村遺跡出土の遺物—縄文時代草創期の土器を中心として」「しなのろじい」No.200、千曲川水系古代文化研究所
- 小柳義男 1984 「上水内郡三水村岩袋遺跡出土の珠洲系陶器」「埋文雜記報」長野埋蔵文化財センター（三水村教育委員会「三水村の文化財」1992に再録）
- 小柳義男・矢野恒雄 1992 「平出遺跡群発掘調査報告書—県道長野・荒瀬原線バイパス工事に伴う発掘調査」長野県上水内郡半札村教育委員会
- 小柳義男・水野福雄・小林秀雄 1997 「上赤塙遺跡発掘調査報告書—縄文中期の集落址」三水村教育委員会
- 坂井秀弥 1990 「越後平安期土器縄年素描—西南部頸城地方を中心にして」「東国土器研究」3号
- 笠澤清・原田勝夫・佐藤慶二・小林 学 1986 「前高山窯跡群—長野国際カントリークラブ造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」長野県上水内郡半札村教育委員会
- 笠澤 浩 1988 「古代の土器」「長野県史 考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物」
- 笠澤 浩・池田 隆・森 佳也 2003 「芋川氏館跡発掘調査報告書」長野県上水内郡三水村教育委員会（なお、同報告書発行年は2002年と記載したが2003年の誤りである）
- 寺内降夫 1991 「長野県上水内郡三水村上赤塙遺跡出土の縄文中期土器について」「長野県考古学会誌61・62」長野県考古学会
- 広瀬忠好 1975 「長野県上水内郡三水村今田遺跡の有孔鋤付土器」「長野県考古学会誌21」長野県考古学会
- 木澤教子 2000 「成果と課題 中期後葉の土器」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24—史跡市内その3—更埴条理遺跡・屋代遺跡群（含む大塙遺跡・深河原遺跡）—縄文時代編—本文」長野県埋蔵文化財センター
- 望月精司 2000 「文化財レポート 小松市御見町遺跡の調査」「日本歴史」2000年2月号
- 横山かよ子 1998 「家岸遺跡—農村総合整備モデル事業農道65号線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」長野県上水内郡半札村教育委員会
- 木山一政ほか 1981 「欠筒城跡」「長野県半札村欠筒城跡遺跡発掘調査報告」半札村教育委員会
- 船出弘実 1993 「野口遺跡」「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12—東筑摩郡坂北村・麻績村内—」長野県教育委員会

+85212

-21420

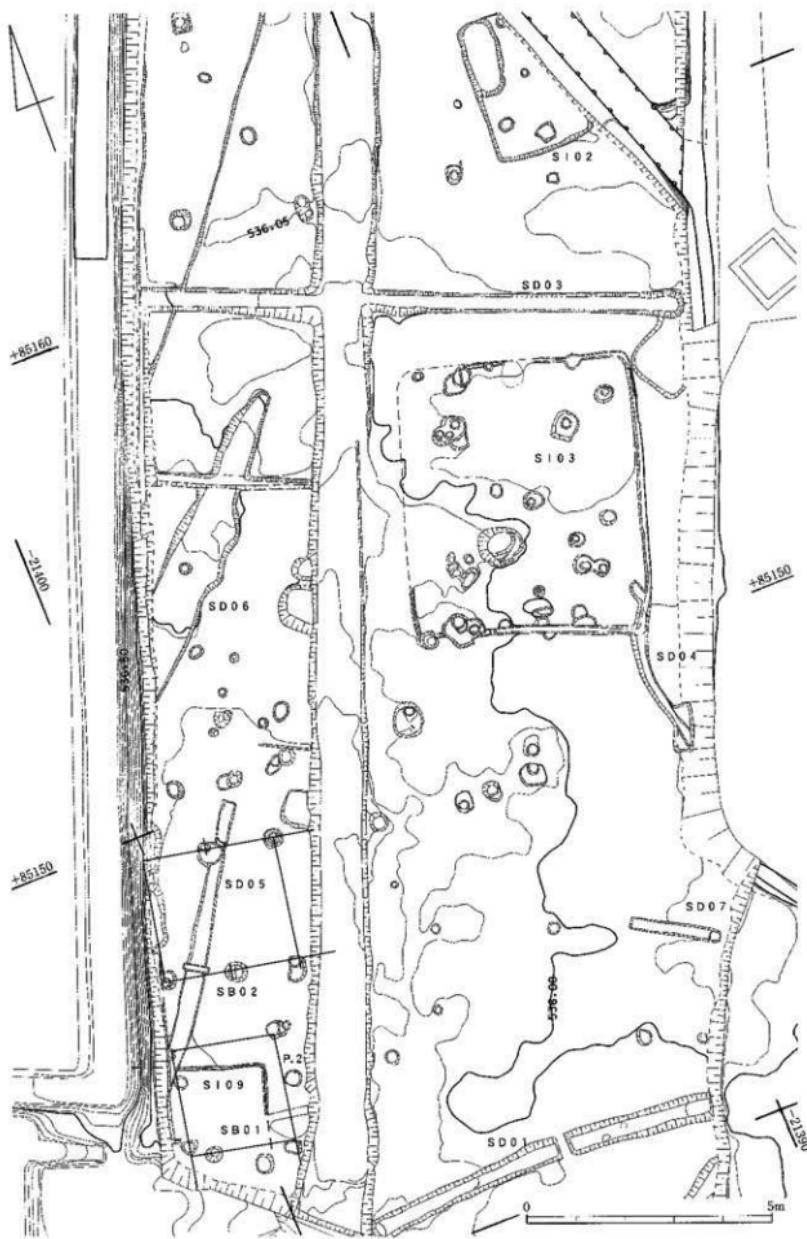


第8図 田中下土浮遺跡全体図 (1 : 400)

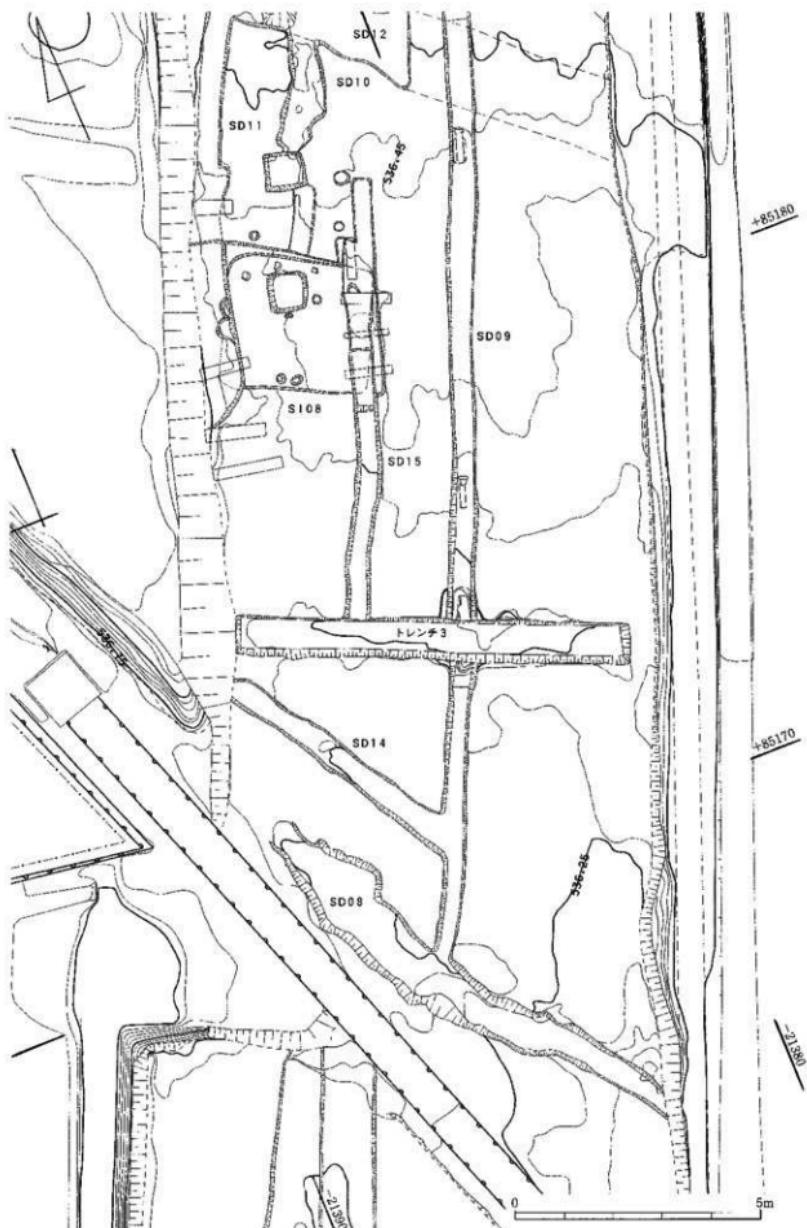
-21360



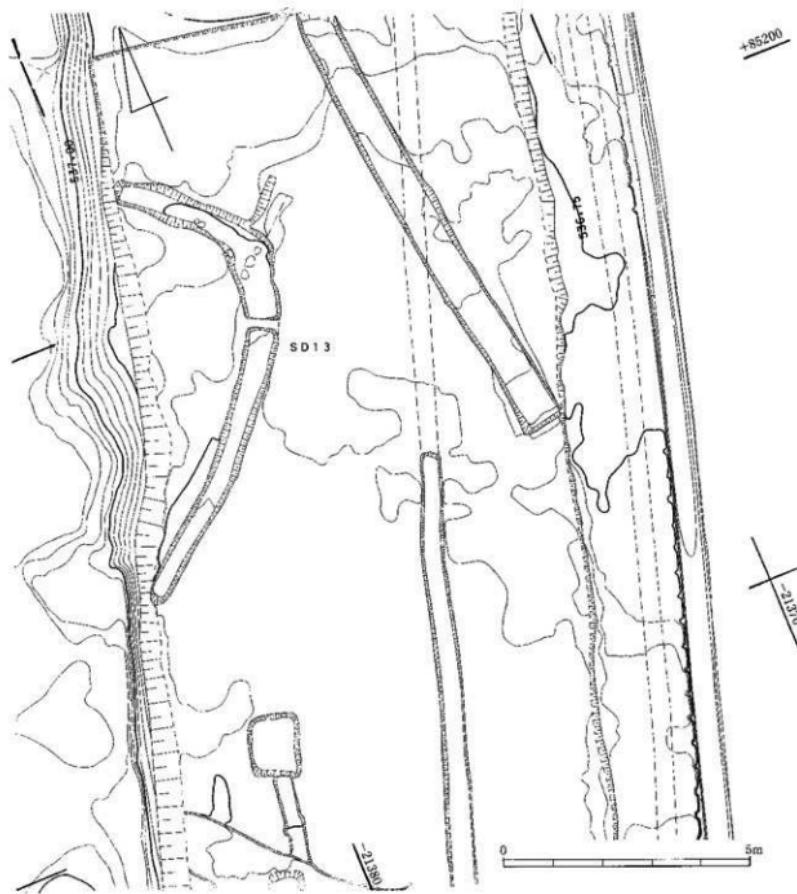
第9図 田中下土浮遺跡発掘図(I) (1:100)



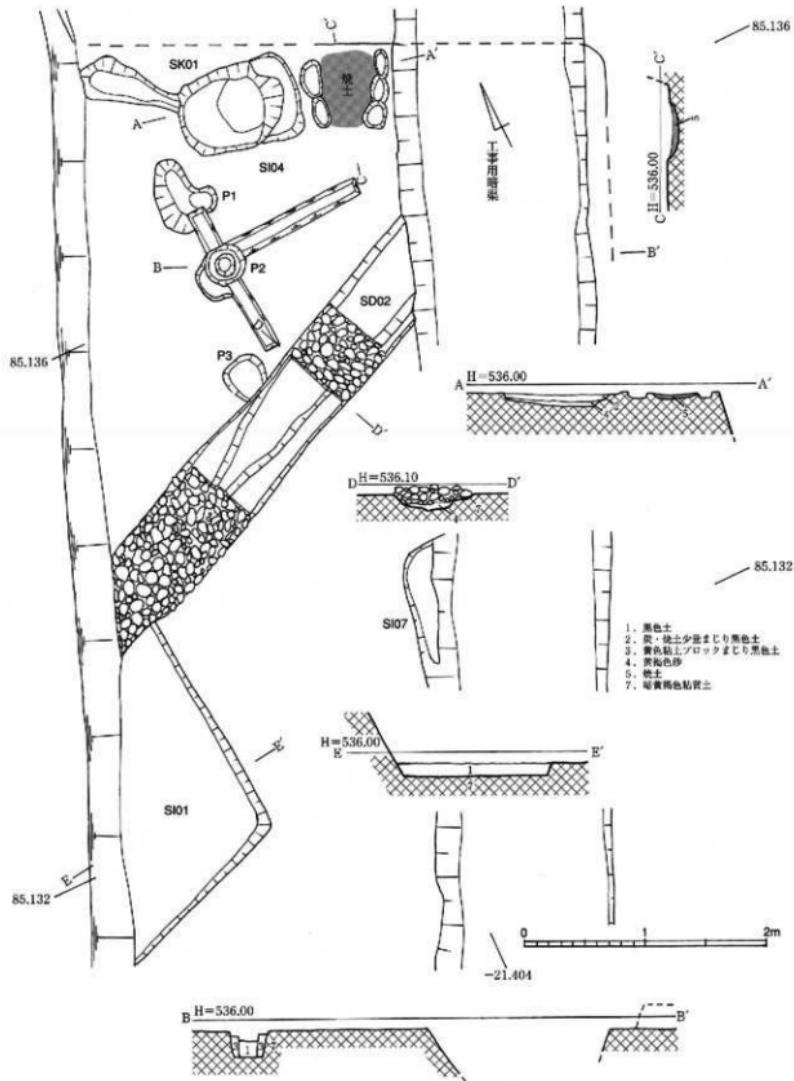
第10図 田中下土浮遺跡発掘図(2) (1:100)



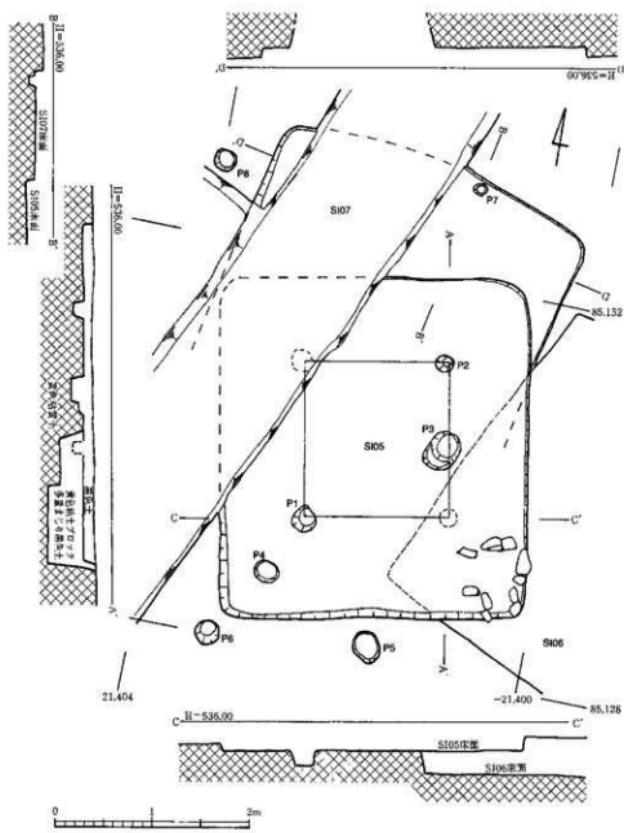
第11図 出中下土浮遺跡発掘図(3) (1 : 100)



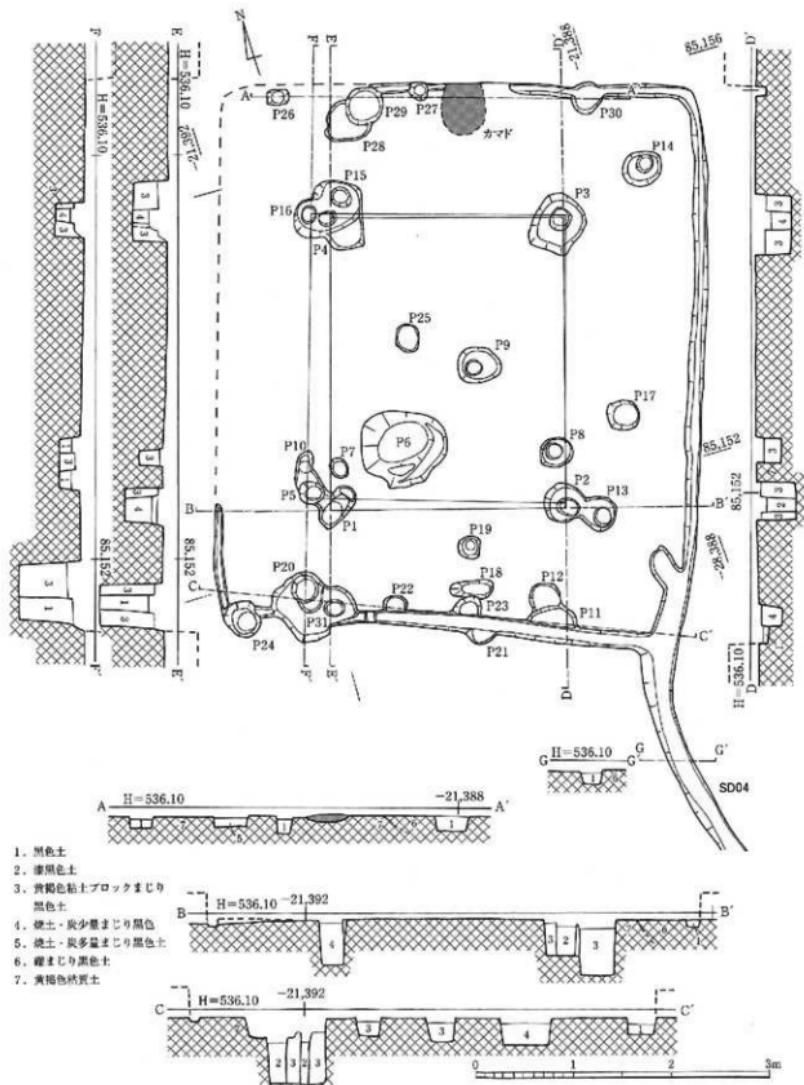
第12図 川中下土浮道路発掘図(4) (1:100)



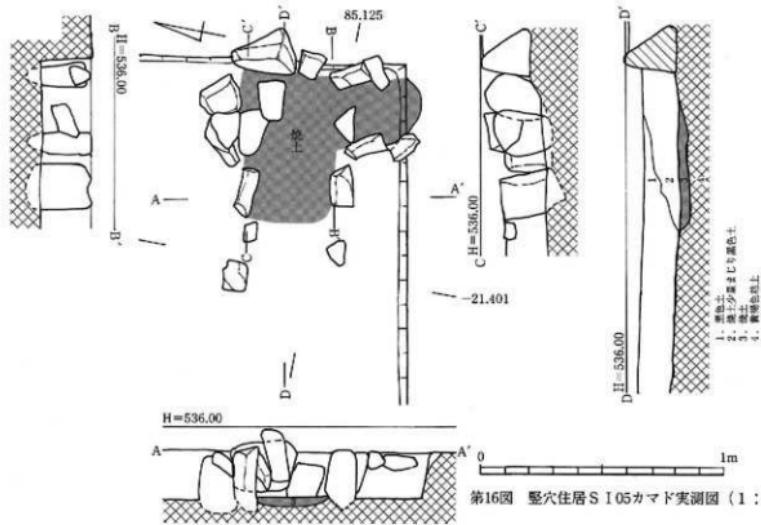
第13図 田中下土浮遺跡竪穴住居SI01・SI04、溝SD02実測図（1:40）



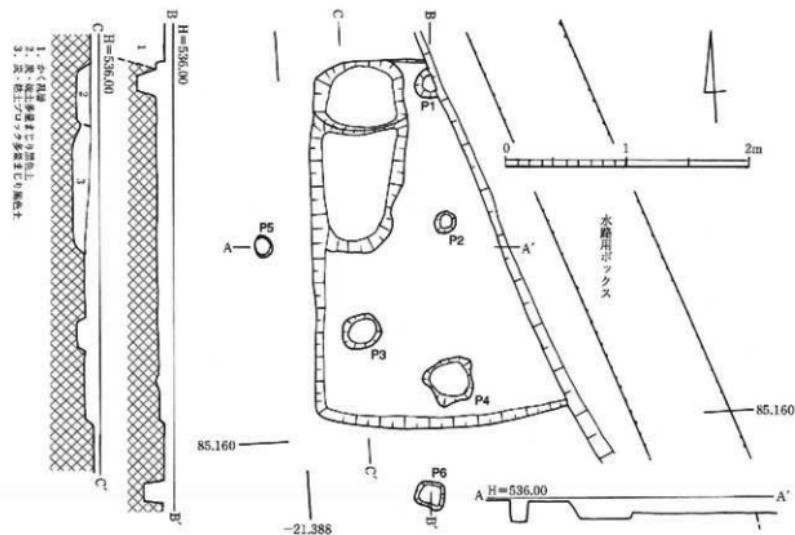
第14図 田中下浮遺跡堅穴居S I 05・S I 07実測図 (1:50)



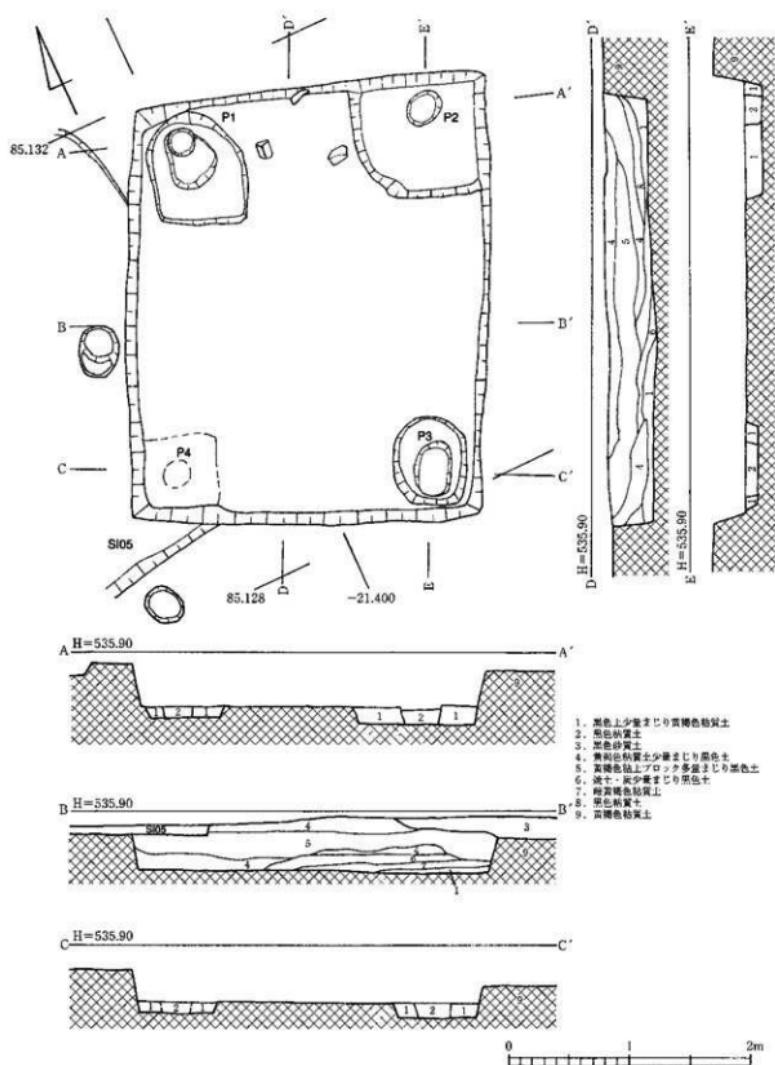
第15図 田中下土浮造跡堅穴住居 S I 03実測図 (1 : 50)



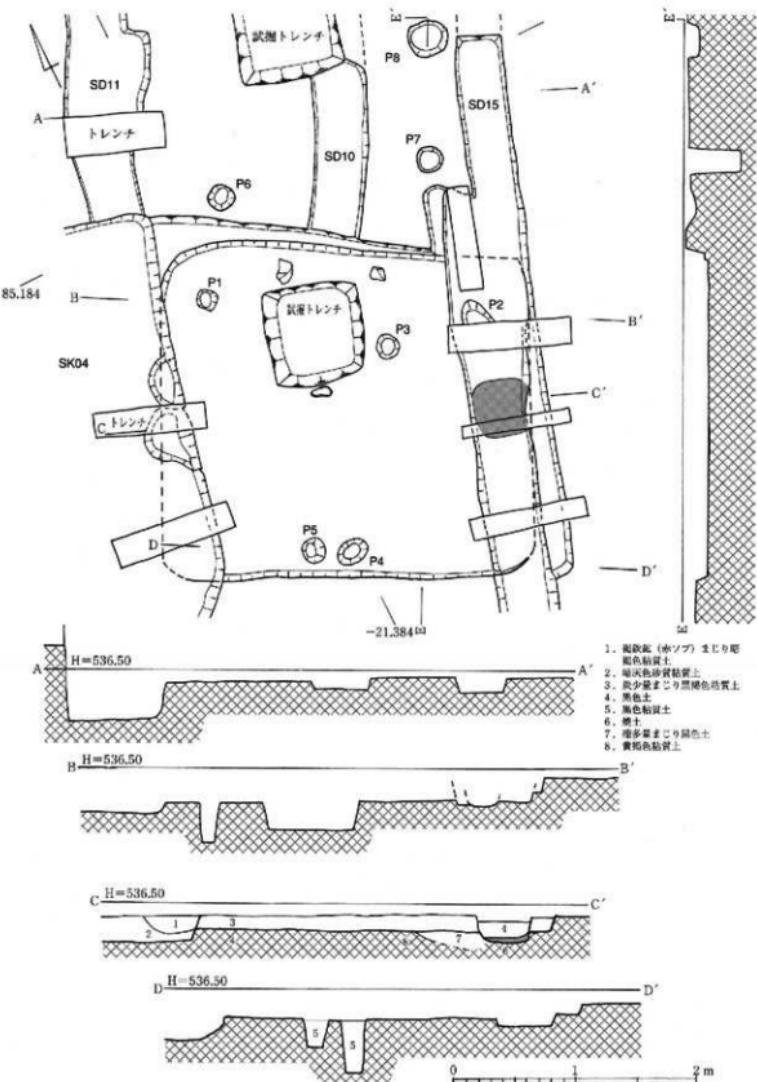
第16図 整穴住居S I 05カマド実測図 (1:20)



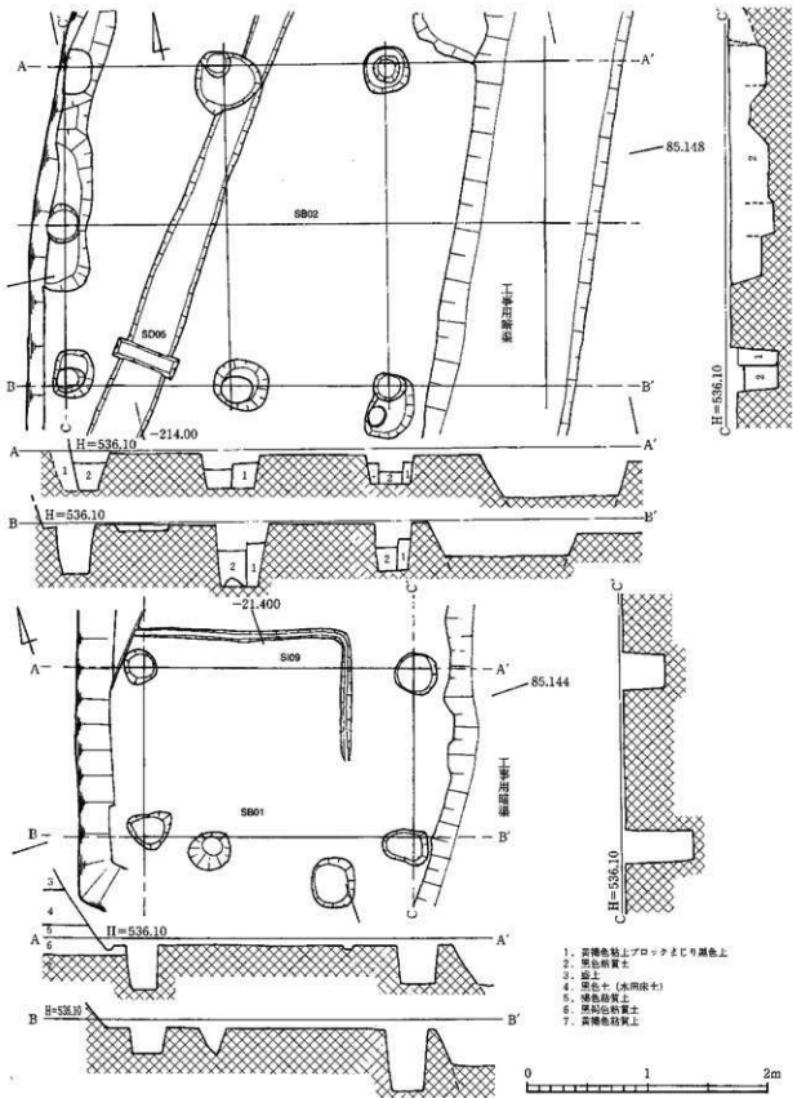
第17図 田中下土浮遺跡整穴住居S I 02実測図 (1:40)



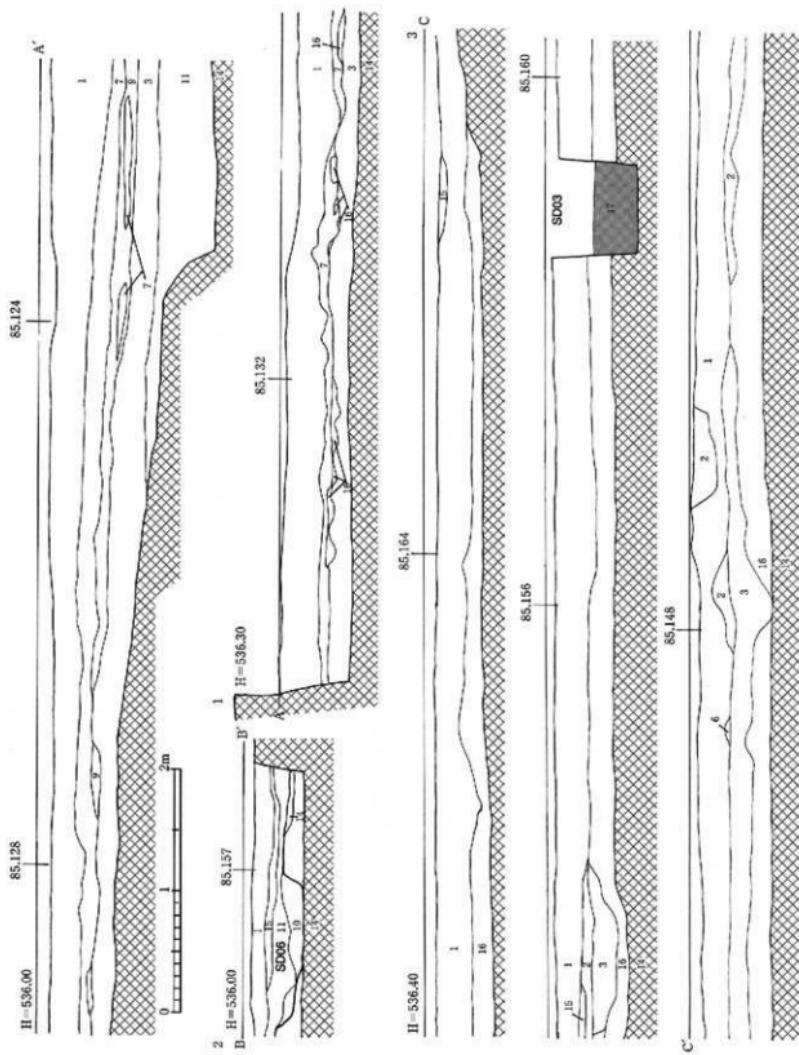
第18図 田中下土浮遺跡堅穴住居 S T06実測図 (1:40)



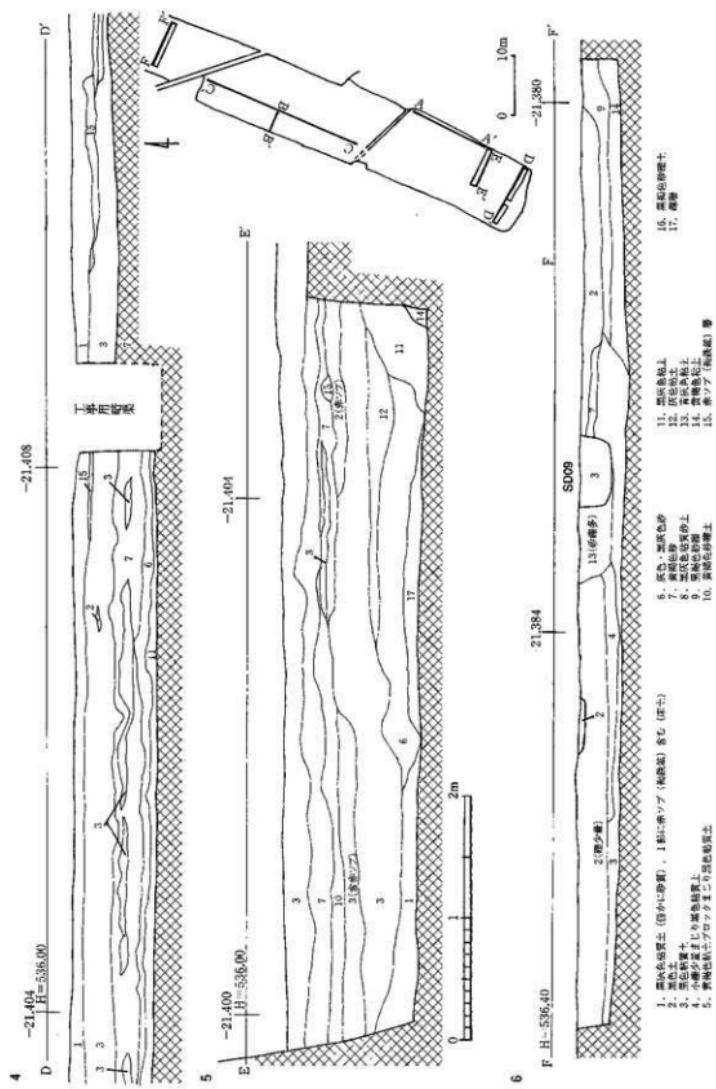
第19図 田中下土浮遺跡竪穴住居 S-08実測図 (1:40)



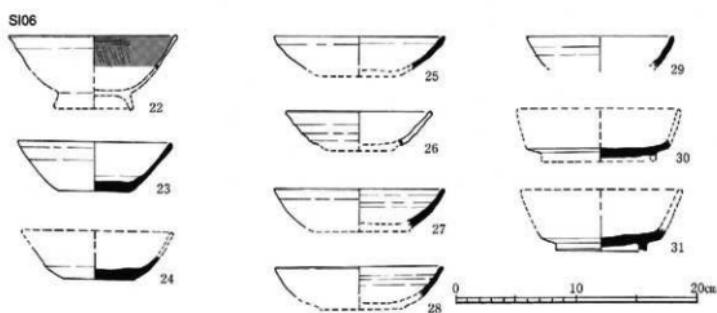
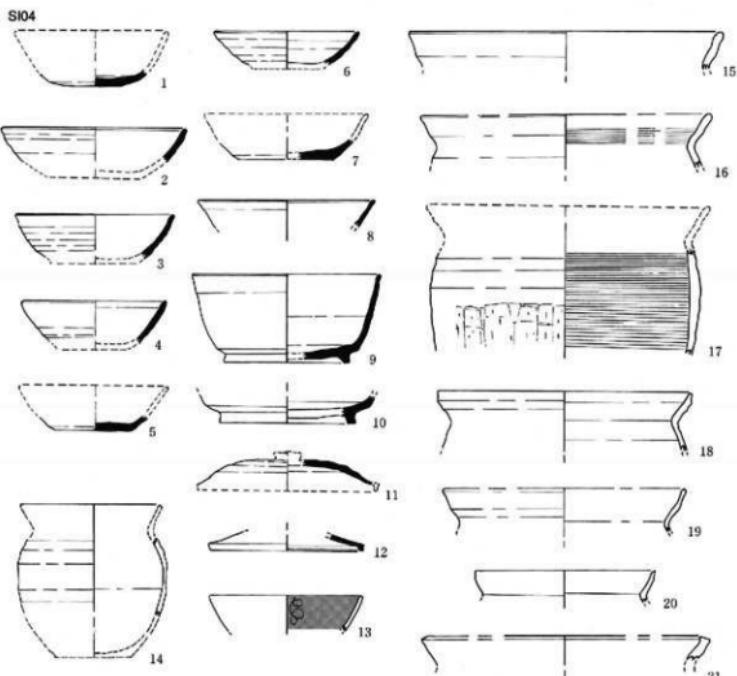
第20図 田中下上浮遺跡掘立柱建物 S B01・S B02, 積穴住居 S I09実測図 (1:40)



第21図 田中下土浮遺跡土層図(1) (1 : 40) 1 A区東 (A-A'), 2 SD06 (B-B'), 3 A区西 (C-C')

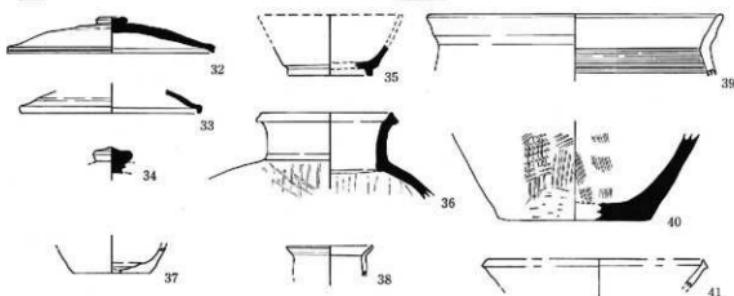


第22図 川中下上浮遺跡土層図(2) (1:40)・土層配置図 4 トレンチ1北壁 (D-D'),
5 トレンチ2南壁 (E-E'), 6 トレンチ3北壁 (F-F')

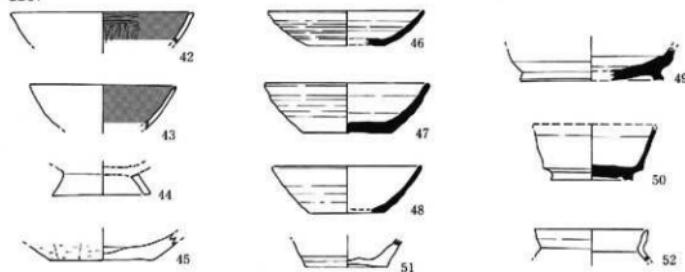


第23図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(I) (1 : 4)

SI06



SD01



SD02



旧淀尾川跡



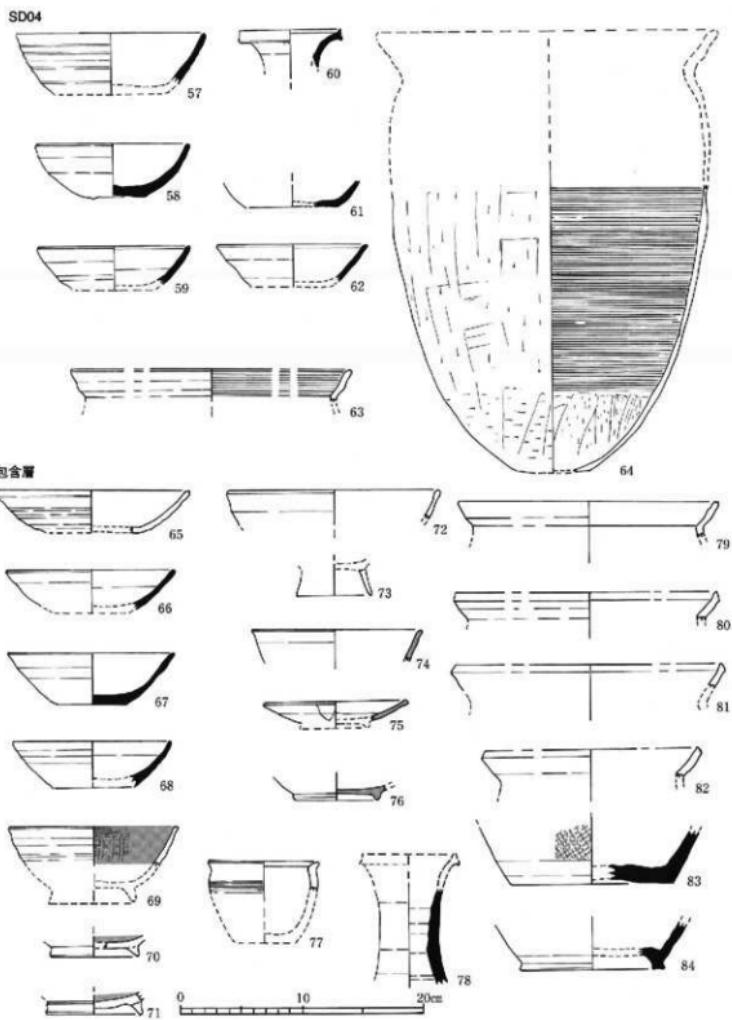
0 10 20cm

Pit20

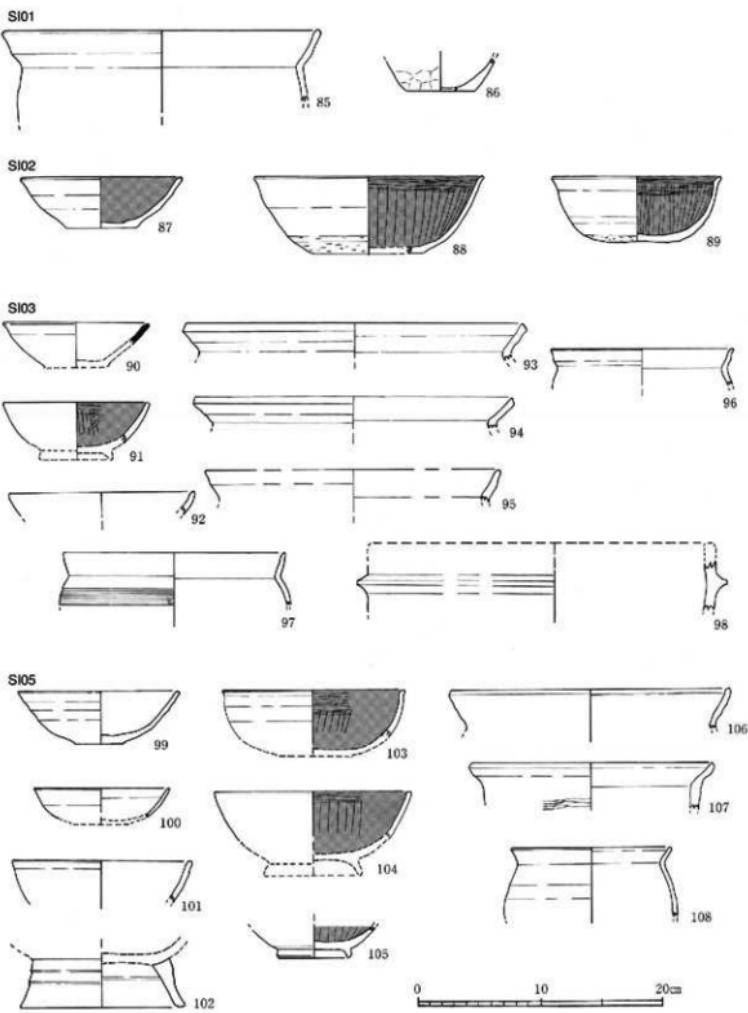


56

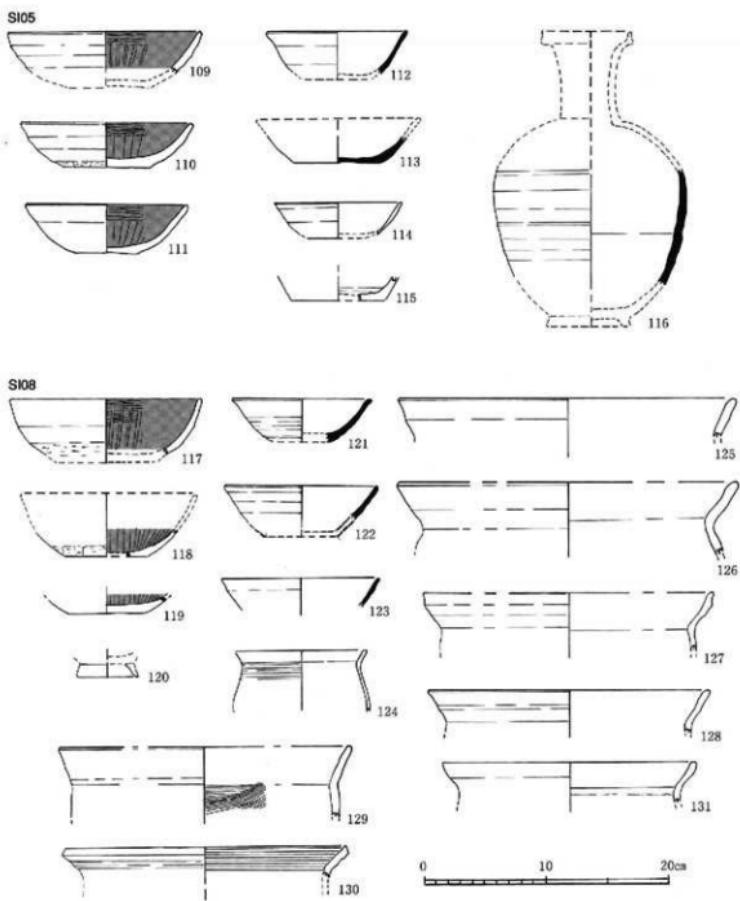
第24図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器② (1 : 4)



第25図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(3) (1 : 4)

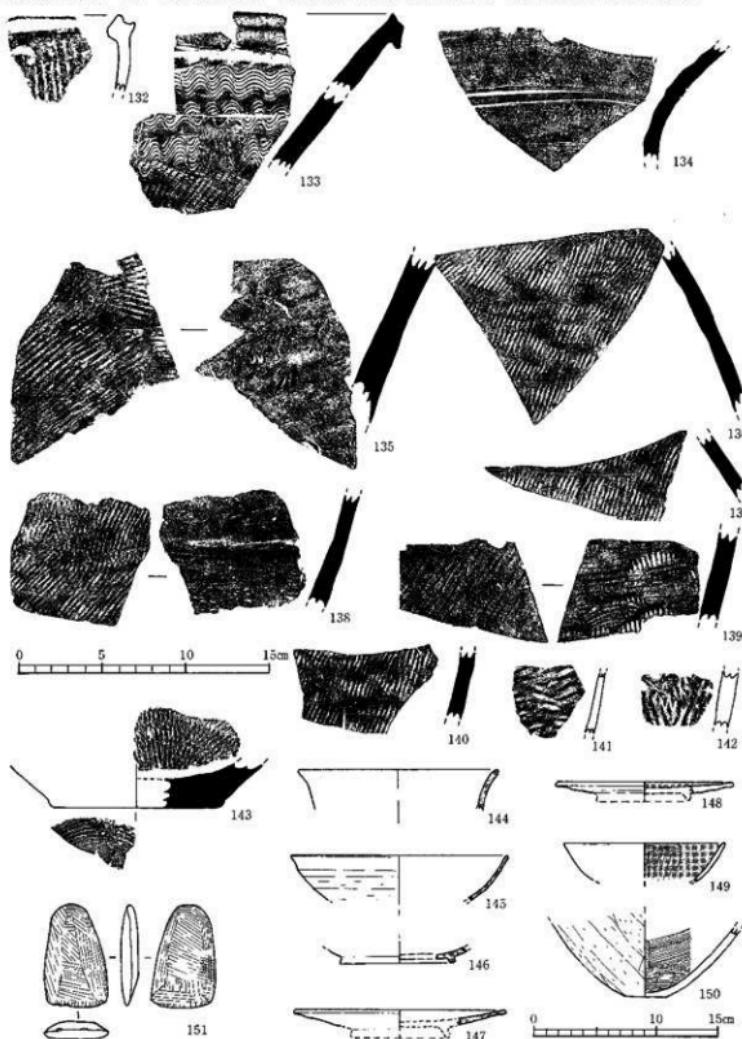


第26図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器(4) (1 : 4)

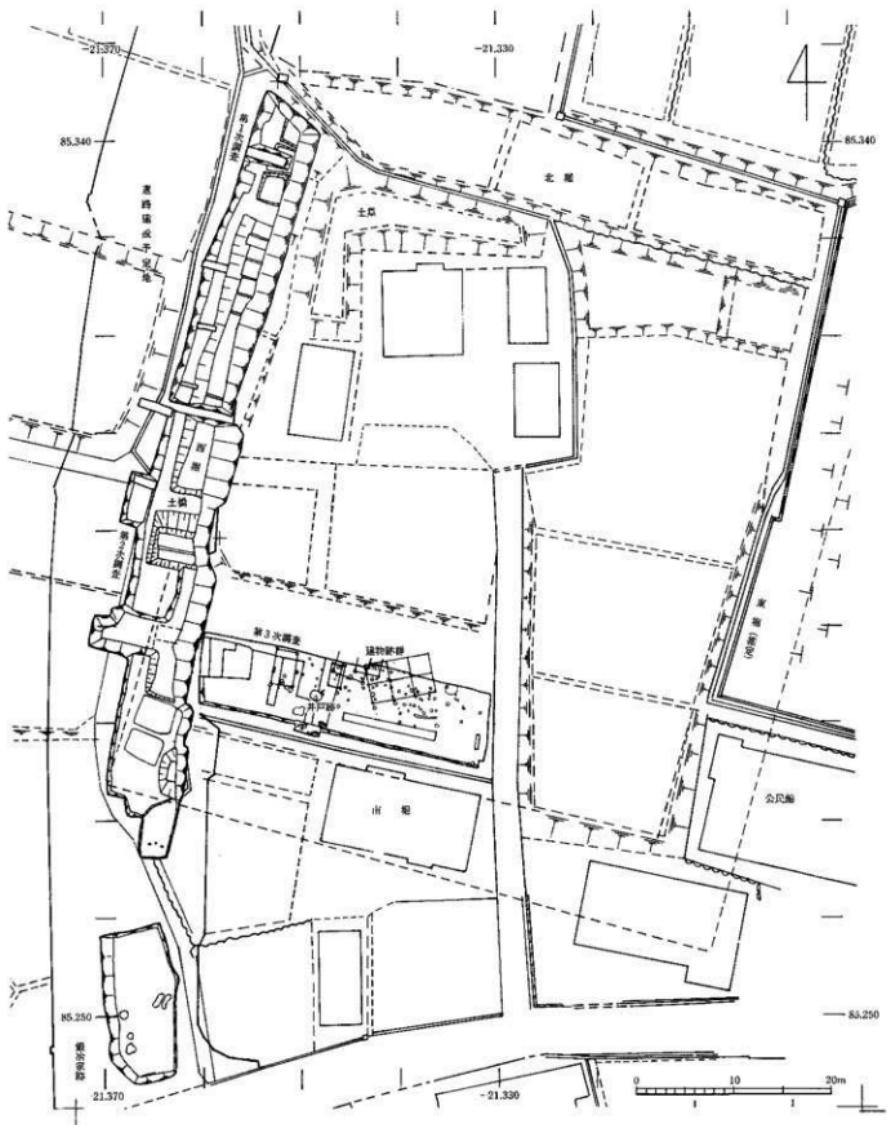


第27図 田中下土浮遺跡出土の奈良・平安時代の土器⑤ (1 : 4)

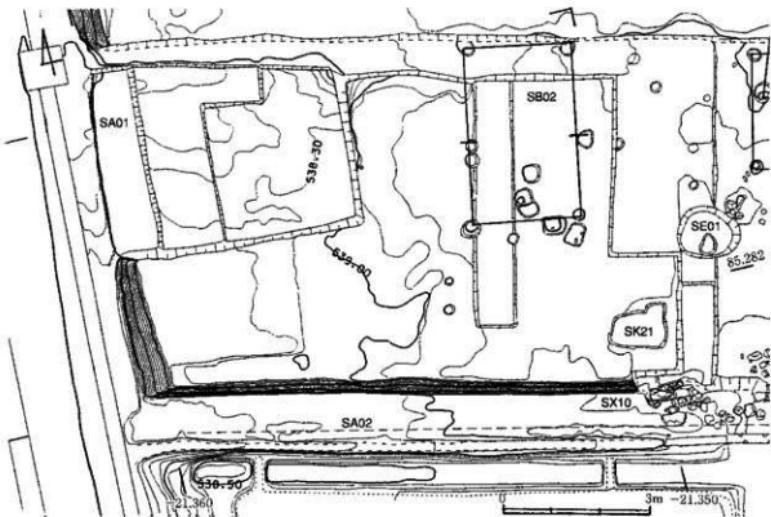
旧坂尾川跡(134・140・146)、SD02(137・150)、SD04(136)、BJ52Pit2(148・149)、SI06埋土(151)、包含層



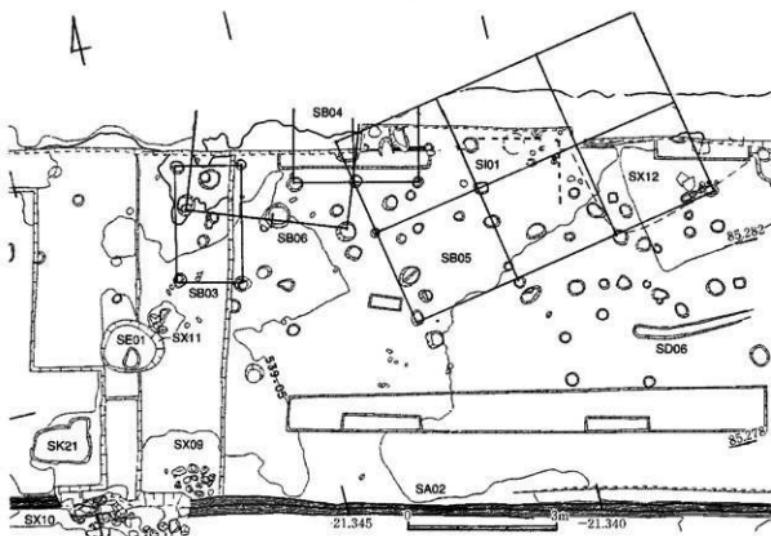
第28図 田中下土浮遺跡出土の網文土器(132)、須恵器(133~140)、上師器(141・142・150)、
黒色土器(148・149)、灰釉陶器(145~147)、中世・近世陶磁器(143・144)、
磨製石斧(151)、拓影・石器(1:3)、土器実測図(1:4)



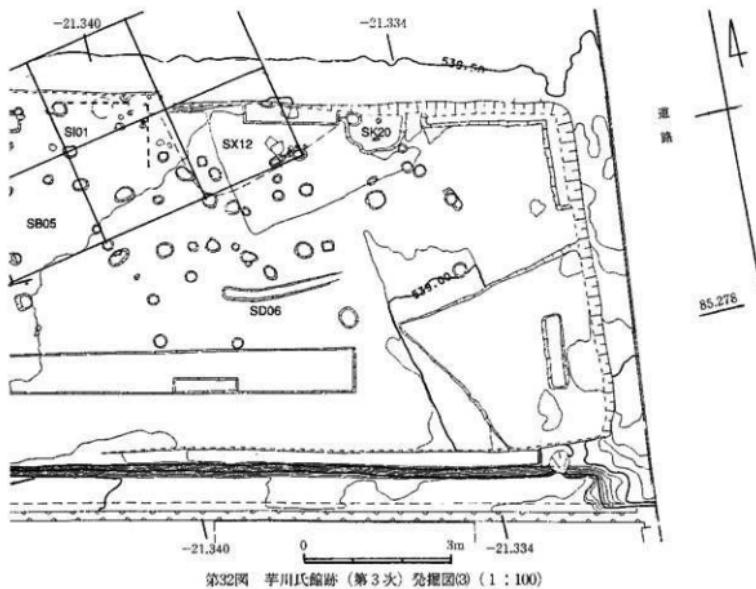
第29図 芦川氏館第1～3次発掘全体図 (1:500)



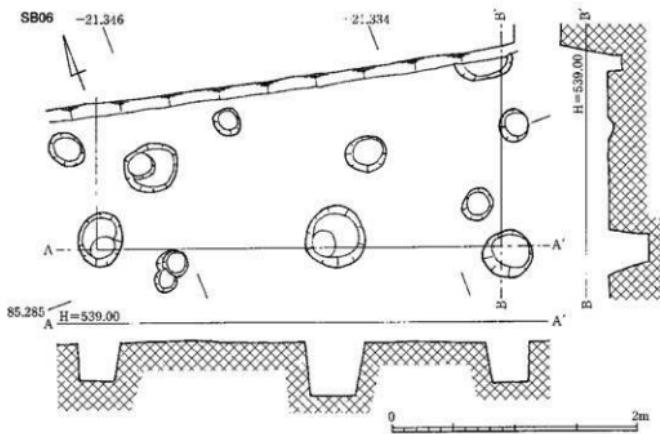
第30図 茅川氏館跡（第3次）発掘図(1) (1 : 100)



第31図 茅川氏館跡（第3次）発掘図(2) (1 : 100)

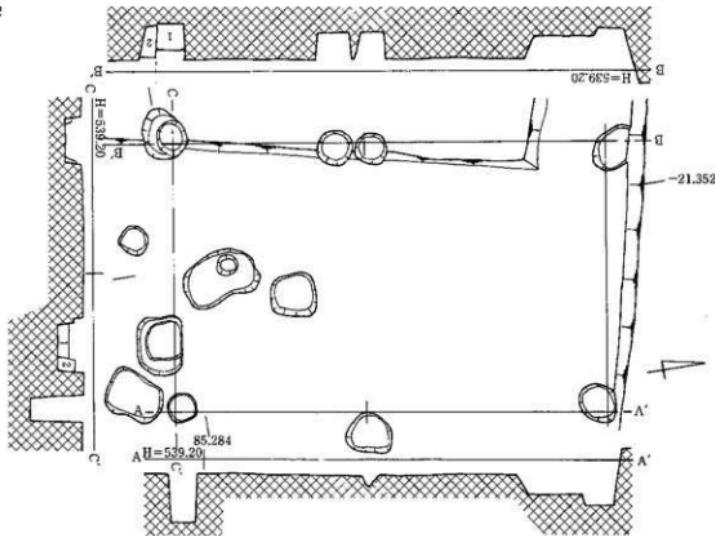


第32図 芹川氏館跡（第3次）発掘図③（1：100）

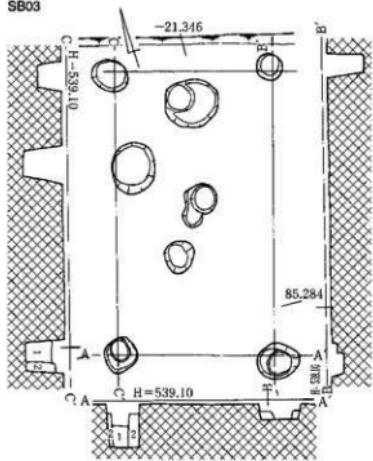


第33図 芹川氏館跡（第3次）掘立柱建物 S B06実測図（1：40）

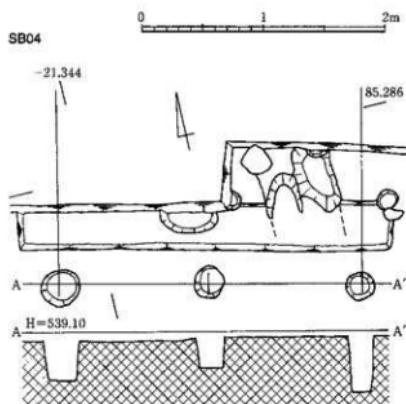
SB02



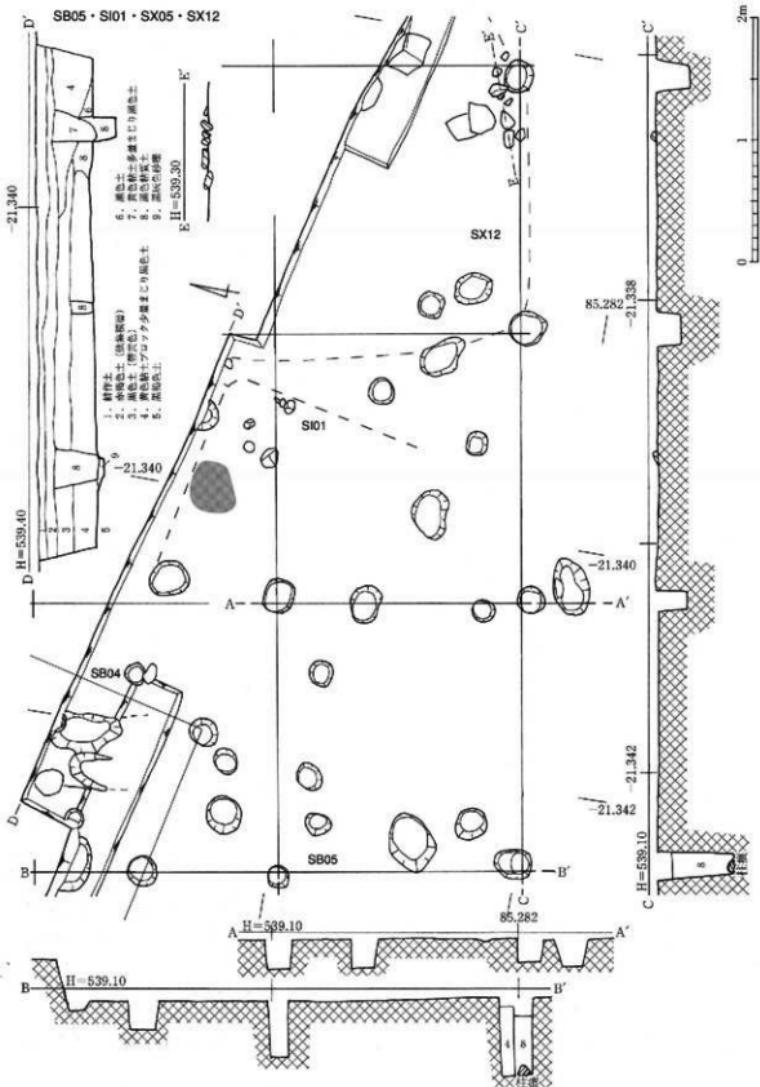
SB03



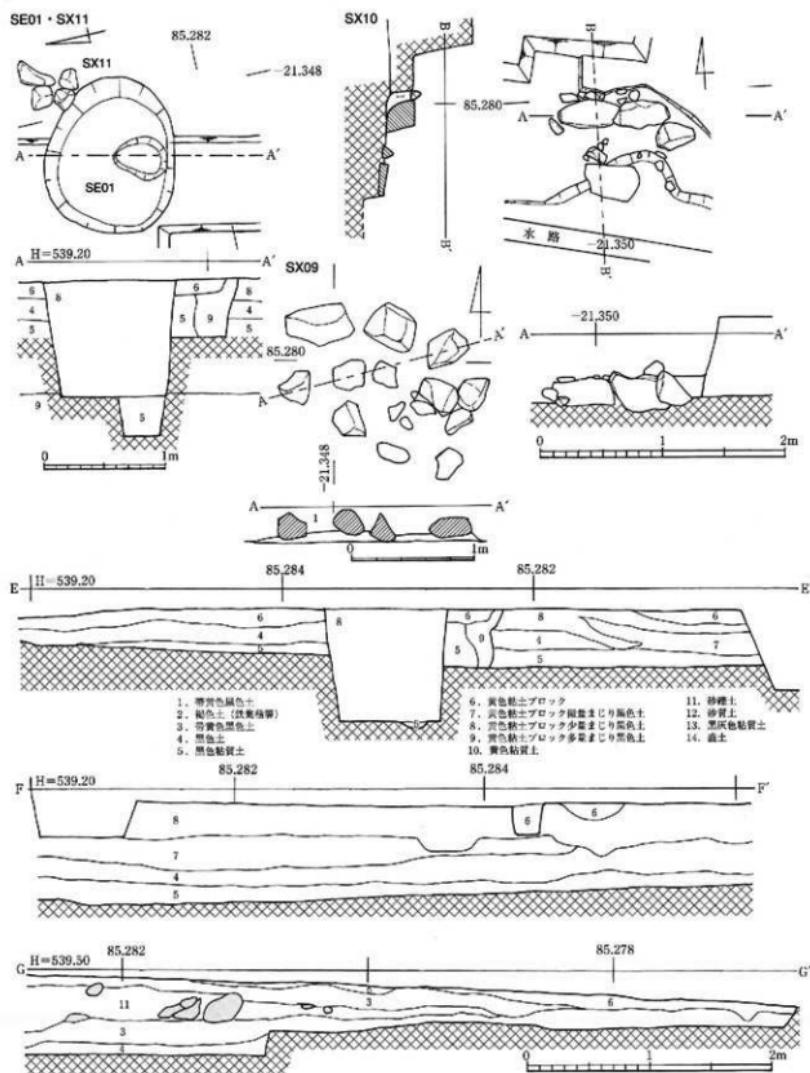
SB04



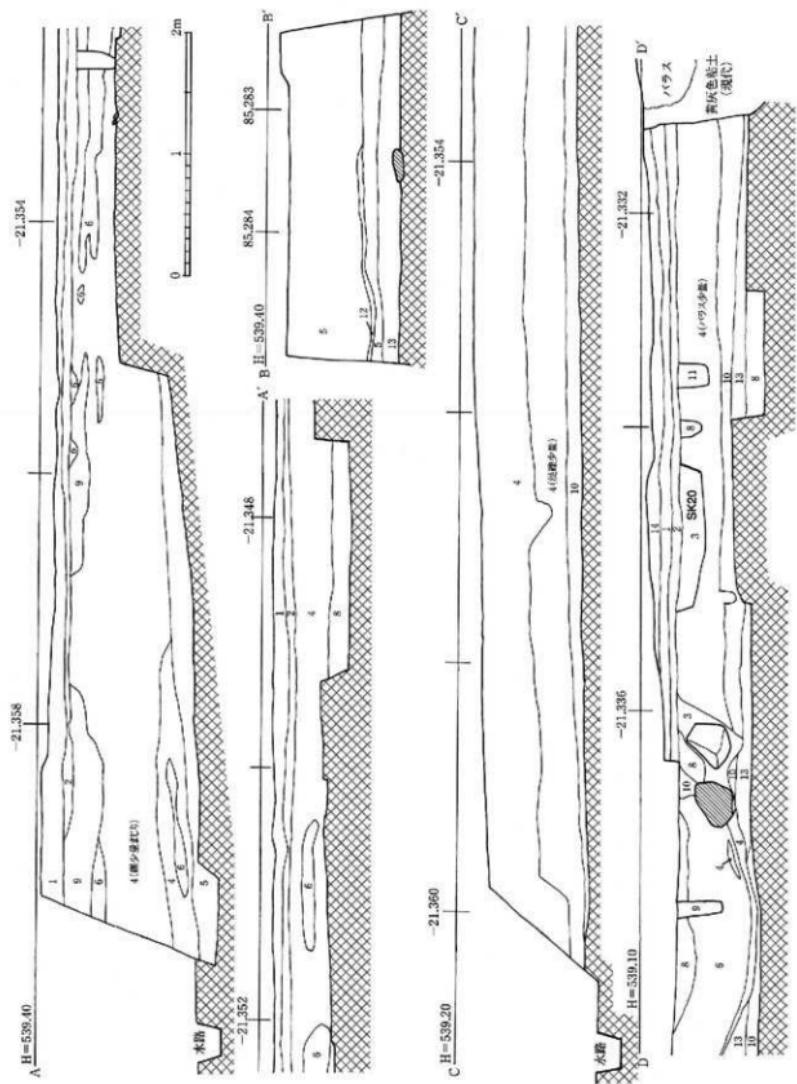
第34図 芹川氏館跡(第3次)掘立柱建物 S B02~S B04実測図 (1:40)



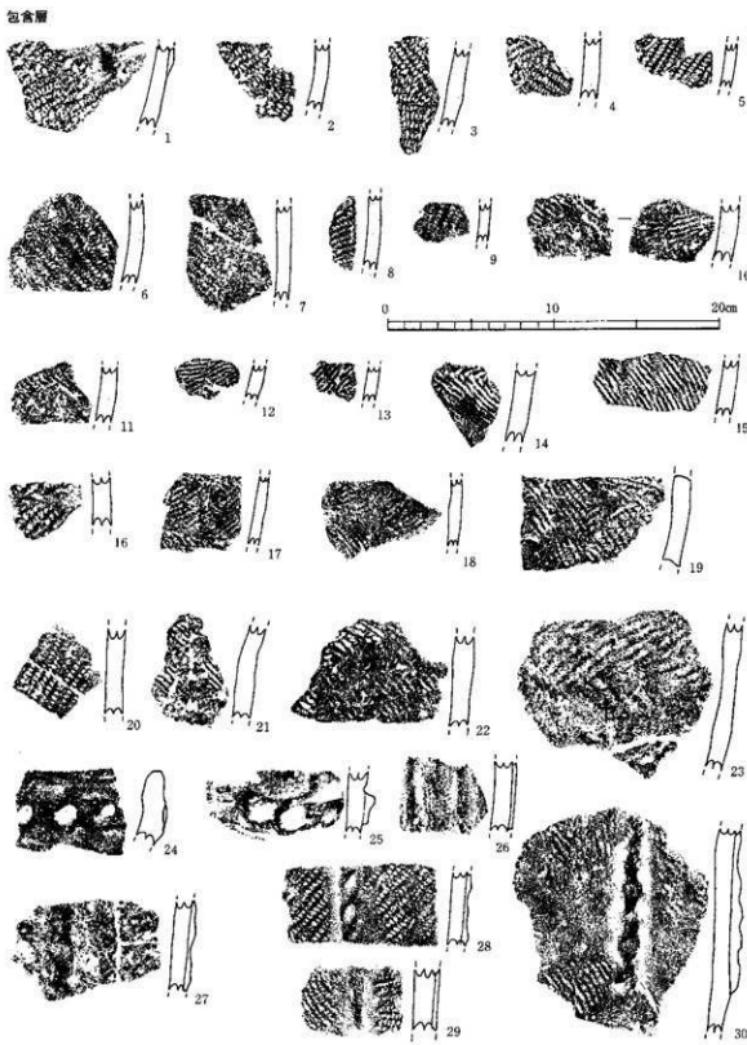
第35図 芦川氏館跡（第3次）掘立柱建物S B04・S B05、堅穴住居S I01、土間状造構S X12実測図（1:40）



第36図 李川氏館蔵(第3次)井戸S E01, 石組SX10, 集石SX09・SX11実測図, 土層図(I)
(石組・集石 1:20, 他 1:40)

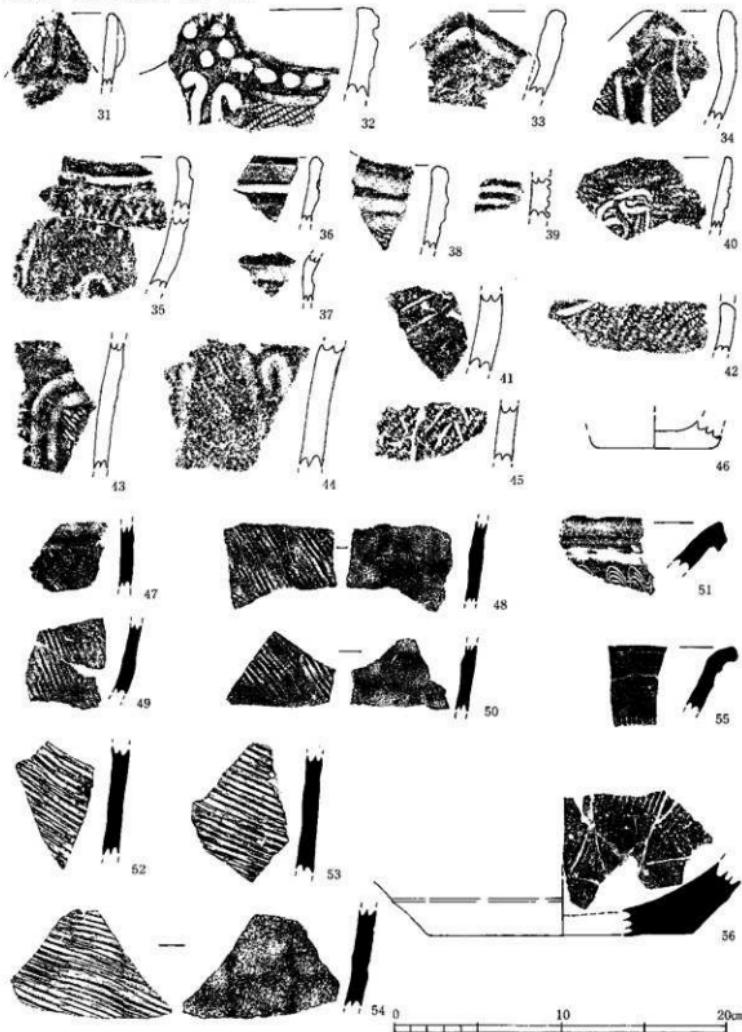


第37図 芦川氏墓跡（第3次）土層図②（1:40）



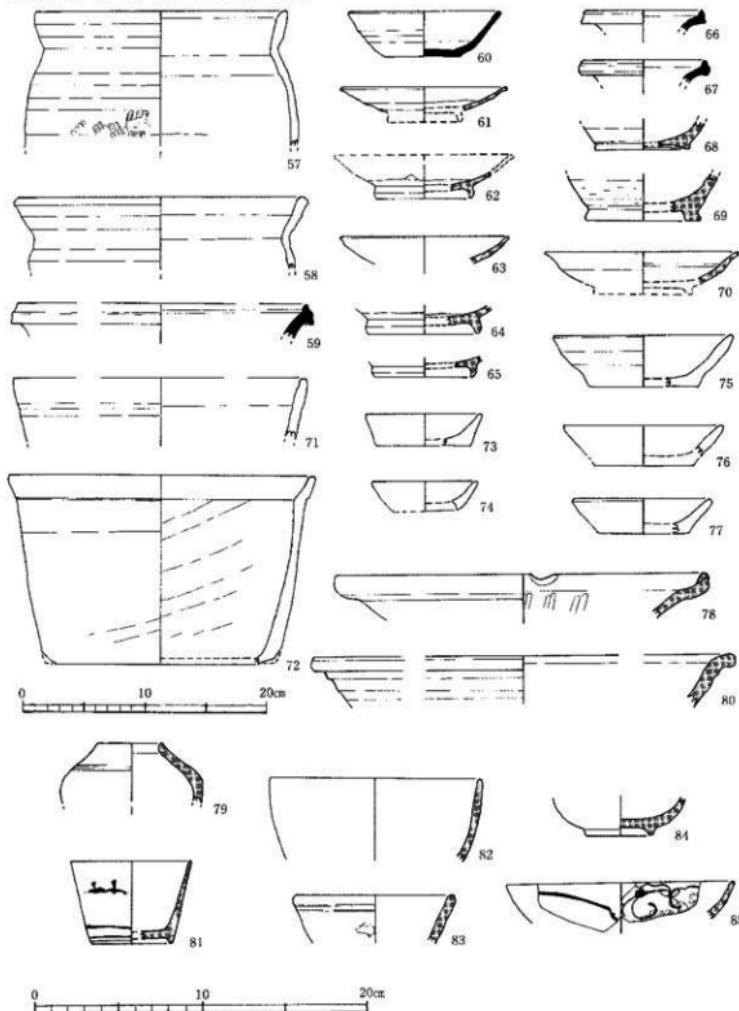
第38図 芋川氏館跡（第3次）出土 繩文土器(1) (1 : 3)

SI01(47~50), SE01(52~54), 包含層



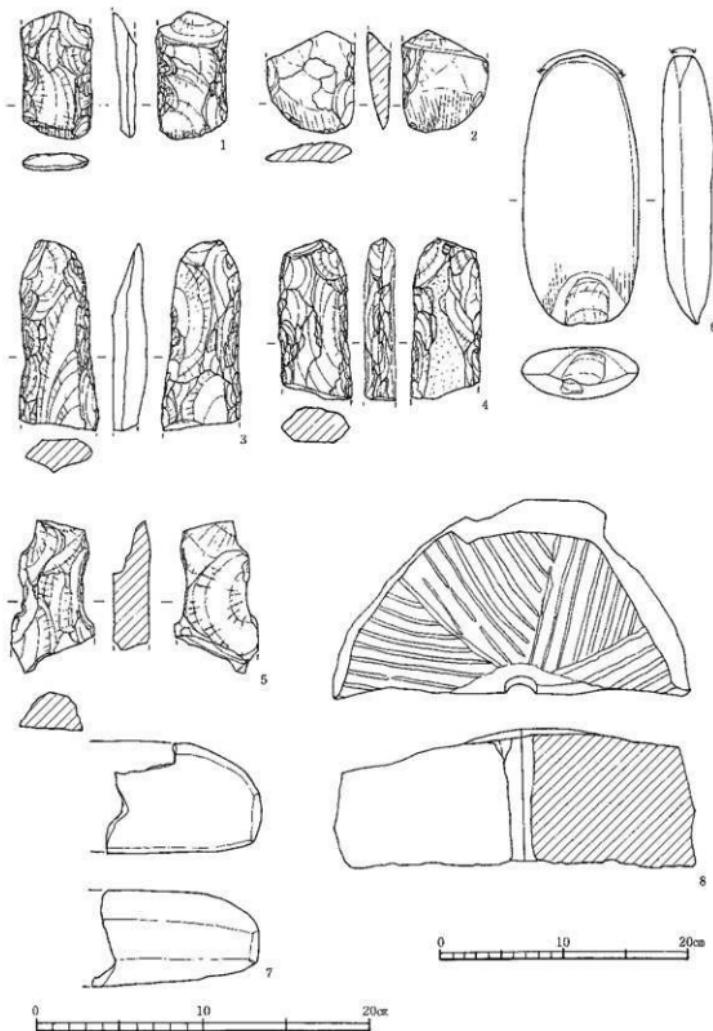
第39図 芦川氏館跡（第3次）出土 繩文土器(2) (31~46), 須恵器 (47~51),
珠洲焼 (52~54), 近世陶器 (55~56) (1 : 3)

SI01(57・58・62・63・65), SX09(82), 包含層



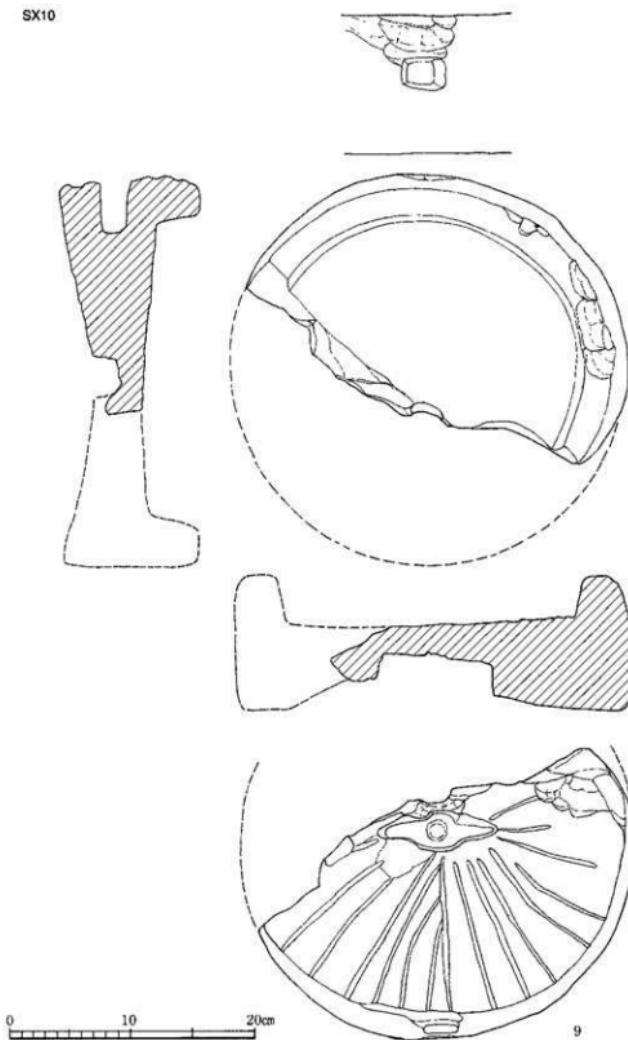
第40図 芹川氏館跡（第3次）出土 上師器（57・58）、須恵器（59・60・66・67）、灰釉陶器（61～65・68）（1：4），
緑釉陶器（70）（1：3）、内耳土鍋（71・72）（1：4）、土師器小皿（73～77），
中世陶磁器（78・79）、中・近世陶磁器（80～85）（1：3）

SX10(8)・包含層



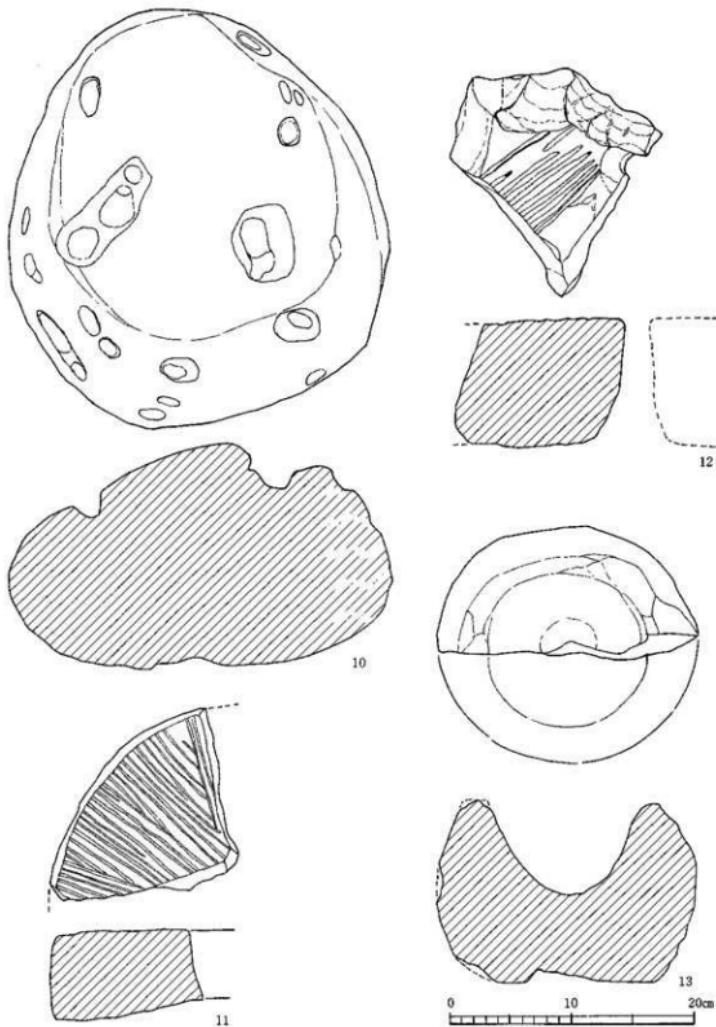
第41図 乎川氏館跡(第3次)出土 石器(I)(1:3)・石製品(I)(1:4)

SX10



第42図 幸川氏館跡（第3次）出土 石製品②（1：4）

SX09(13)・SX10(10~12)



第43図 手川氏館跡（第3次）出土 石器②・石製品③（1：4）

写真図版

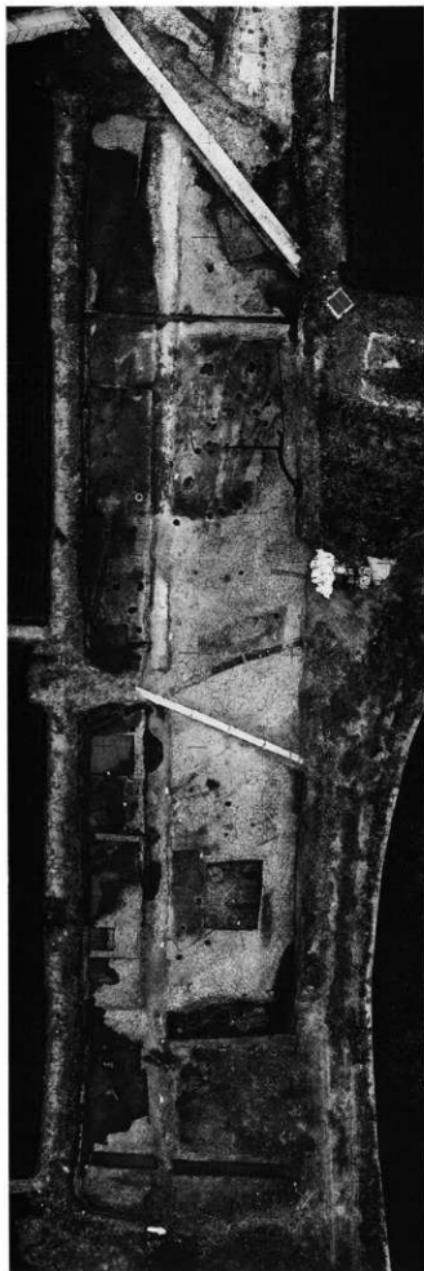


全景 後方の森
が李川氏館跡
(南上空から)



全景
(東上空から)

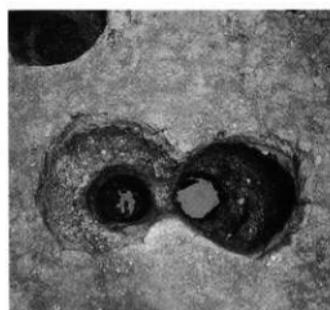
P L 2 田中下土浮遺跡



左：全景
(上端北)
右上
溝 S D01
(東から)



右中
掘立柱建物
S B02
掘り方立ち割
(掘り方・柱痕
跡・柱痕)



右下
整穴住居
S I03
柱穴掘り方
と柱痕跡



現班尾川と
旧班尾川跡
(上端西)



旧班尾川跡(左)
と堅穴住居群
(西から)

P L 4 田中下土浮遺跡



豊穴住居
S I 05
(東南から)



旧產尾川東岸と
豊穴住居
S I 06



P L 6 田中下土浮遺跡



竪穴住居
S 106
完掘状態
(西から)



竪穴住居
S 106
(西から)



竪穴住居
S 106
<埋土>
(西から)

堅穴住居
S I 03
(北から)



堅穴住居
S I 03
(南から)



堅穴住居
S I 02
(南から)



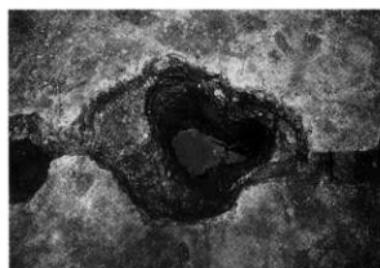
P L 8 田中下土浮遺跡



竪穴住居
S I 05カマド
左
西から
右
カマド石
据付け状況



左
北から
右
東から



左
竪穴住居
S I 04
カマド石
据付け状況
右
竪穴住居
S I 03
周溝と柱穴



竪穴住居
S I 06
左
西北隅
右
北壁中央
カマド痕跡

C地区全景
(北から)



竪穴住居
S I 01と暗渠
S D 02掘り方



P L 10 田中下土浮遺跡



堅穴住居
S I 08
(北から)



堅穴住居
S I 08
(南から)



堅穴住居
S I 08
(東から)



B地区
掘立柱建物群
(北から)



B地区
掘立柱建物群
(南から)

P L 12 芸川氏館跡



堀立柱建物
S B01・S B02
(北から)



堀立柱建物
S B02
(南から)



全景
(西上空から)



全景
(東から奥見城
を望む)

P L 14 芦川氏館跡



全景
(西から)



柱穴群と
井戸 S E 01
(西から)

掘立柱建物群
(西から)



土間状遺構
S X 12
(南から)



P L 16 芦川氏館跡



全景
(上空から)



左
主郭東南隅
右
西土塁土層
断面



左
井戸 S E01
埋土
右
堀立柱建物
S B01周辺
土層



左
集石 S X09
右
石組 S X10



報告書抄録

書名	田中下土浮遺跡・芋川氏館跡(第3次)発掘調査報告書							
副書名	――							
シリーズ名	――							
シリーズ番号	――							
編著者	筒澤 浩							
編集機関	三水村教育委員会							
所在地	〒389-1201 長野県上水内郡三水村芋川324 TEL026-253-2501							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田中下土浮遺跡	長野県上水内郡 三水村芋川	5851	30	36° 138°	2003年	1,200m ²	緊急地方道路整備事業(芋川バイパス) (長野県上水内郡実施)	
芋川氏館跡	同上	5851	22	45' 15' 51" 18"	4月28日~ 7月30日	250m ²	同上	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
田中下土浮遺跡	集落跡	绳文時代 ~近世	竪穴住居跡、 掘立柱建物跡、 井戸跡	绳文土器(前期初頭、中期後葉)須 恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、 綠釉陶器、陶磁器、内耳土鍋、石器、 石製品				
芋川氏館跡	館跡・集落跡							

*本書8ページ掲載の地図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである
(承認番号 平15閲複 第75号)

田中下土浮遺跡・芋川氏館跡(第3次)
発掘調査報告書

発行日 平成16年3月31日

発行 三水村教育委員会
長野県上水内郡三水村芋川324

印刷 ほおづき書籍株式会社
〒381-0012 長野市柳原2133-5

